

Inbound Refinery

インストレーション・ガイド

10g リリース 3 (10.1.3.3.0)

部品番号 : E05642-01

2007 年 9 月

Inbound Refinery インストール・ガイド, 10g リリース 3 (10.1.3.3.0)

部品番号 : E05642-01

原本名 : Inbound Refinery Installation Guide, 10g Release 3 (10.1.3.3.0)

原本部品番号 : A00089-01

原本協力者 : Eric Raney, Bruce Silver, Brian Bergstrom, Alex Sanchez

Copyright © 2007 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

第 1 章：はじめに

概要	1-1
Inbound Refinery について	1-1
このガイドについて	1-4
表記規則	1-4
Inbound Refinery のドキュメント	1-5
オンライン・ヘルプ・システム	1-5
PDF ドキュメント	1-6

第 2 章：インストール前の作業と考慮事項

概要	2-1
ハードウェア要件	2-2
ソフトウェア要件	2-2
オペレーティング・システム	2-3
サポートされるオペレーティング・システム	2-3
すべてのオペレーティング・システムに関する考慮事項	2-4
Windows に関する考慮事項	2-4
UNIX に関する考慮事項	2-5
Java 仮想マシン (JVM)	2-6
Web サーバー	2-7
サポートされる Web サーバー	2-7
すべての Web サーバーに関する考慮事項	2-7
Microsoft インターネット・インフォメーション・サービス (IIS) に関する考慮事項	2-8
Sun Java System Web Server に関する考慮事項	2-8
Apache に関する考慮事項	2-8
Web ブラウザ	2-10
ブラウザに関する一般的な考慮事項	2-10
Windows クライアントで推奨されるブラウザ	2-10
UNIX クライアントで推奨されるブラウザ	2-11
Mac クライアントで推奨されるブラウザ	2-11
Content Server	2-12

X Server、Motif、LessTif	2-12
Windows または UNIX に Inbound Refinery をインストールする場合の 考慮事項	2-13
Inbound Refinery 環境の準備	2-14
Inbound Refinery のインストールとセットアップの概要	2-18

第 3 章： Inbound Refinery のインストール

概要	3-1
コマンドラインのインストール	3-2
自動インストール	3-10
スクリプト・ファイルの作成	3-10
自動インストールの実行	3-11

第 4 章： インストール後の作業と考慮事項

概要	4-1
インストール・ログ・ファイル	4-2
Content Server への InboundRefinerySupport コンポーネントの インストール	4-2
コンポーネント・マネージャを使用した InboundRefinerySupport コンポーネントのインストール	4-3
コンポーネント・ウィザードを使用した InboundRefinerySupport コンポーネントのインストール	4-4
Web サーバーの構成	4-5
Web サーバーの手動構成	4-5
Sun Web Server の構成ファイル	4-5
IIS 6.0 に対する MIME タイプの登録	4-6

第 5 章： リファイナリの起動と停止

概要	5-1
Windows サービスとしてのリファイナリの開始、停止、再起動	5-2
Windows アプリケーションとしてのリファイナリの起動と停止	5-4
UNIX でのリファイナリの起動と停止	5-5
リファイナリへのログオン	5-6
管理サーバーを使用したリファイナリの起動と停止	5-7
Windows でのサービスとしての管理サーバーの開始、停止、 再起動	5-7
Windows でのアプリケーションとしての管理サーバーの起動、 停止、再起動	5-8

UNIX での管理サーバーの起動と停止	5-9
管理サーバーを使用したリファイナリの起動、停止、再起動	5-10
管理サーバーへのリファイナリの追加	5-10

第 6 章：既存の Inbound Refinery の更新

概要	6-1
サポートされる更新バージョン	6-1
始める前に	6-2
コマンドライン・インストーラを使用した 10g リリース 3 の リファイナリの更新	6-3

付録 A: インストール・スクリプト・ファイル

概要	A-1
スクリプト・ファイルについて	A-2
スクリプト・ファイルの構造	A-2
スクリプト・ファイルのエントリ	A-4
一般的な考慮事項	A-4
スクリプト・ファイルのエントリ	A-5
自動インストールへのスクリプト・ファイルの使用	A-12
スクリプト・ファイルのエントリの変更	A-13
Windows のコマンドラインでの特別なインストール作業の実行	A-14

付録 B: Web サーバーの手動セットアップ

概要	B-1
IIS 5.0 (Windows 2000 Server) のセットアップ	B-2
Web サーバーの指定	B-2
パスワード認証の設定	B-2
仮想ディレクトリ (エイリアス) の設定	B-3
ISAPI 認証フィルタの設定	B-5
フィルタ名と場所の指定	B-6
IIS 6.0 (Windows Server 2003) のセットアップ	B-7
Web サーバーの指定	B-7
パスワード認証の設定	B-7
仮想ディレクトリ (エイリアス) の設定	B-8
ISAPI 認証フィルタの設定	B-10
フィルタ名と場所の指定	B-11
Web サービス拡張の設定	B-12
MIME タイプの登録	B-12

Sun Web Server のセットアップ	B-13
ドキュメント・ディレクトリの追加	B-13
CGI ディレクトリの指定	B-14
obj.conf ファイルの変更	B-14
magnus.conf ファイルの変更	B-15
フィルタ名と場所の指定	B-16
Apache のセットアップ	B-17
リファイナリ用の Apache の構成	B-17
Apache でのデバッグの有効化	B-18
ログ・ダンプ・ファイル	B-19
正規名の無効化	B-19

付録 C: Inbound Refinery のアンインストール

概要	C-1
Windows でのコマンドラインを使用した Inbound Refinery の アンインストール	C-2
Windows での手動による Inbound Refinery のアンインストール	C-3
UNIX での Inbound Refinery のアンインストール	C-4

付録 D: サード・パーティ・ライセンス

概要	D-1
Apache Software License	D-1
W3C® Software Notice and License	D-2
Zlib License	D-4
一般的な BSD ライセンス	D-5
一般的な MIT ライセンス	D-5
Unicode ライセンス	D-6
その他の帰属	D-7

索引

1

はじめに

概要

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ [Inbound Refinery について](#) (1-1 ページ)
- ❖ [このガイドについて](#) (1-4 ページ)
- ❖ [表記規則](#) (1-4 ページ)
- ❖ [Inbound Refinery のドキュメント](#) (1-5 ページ)

INBOUND REFINERY について

Inbound Refinery 10g リリース 3 は、ファイルの変換を管理し、サムネイル化機能を提供する、変換サーバーです。Inbound Refinery は、Windows または UNIX サーバーで次の目的に使用できます。

- ❖ [Outside In Image Export](#) を使用してファイルのサムネイルを作成する。サムネイルはコンテンツの小さなプレビュー・イメージです。
- ❖ [Outside In Image Export](#) を使用して、ファイルを複数ページの TIFF ファイルに変換する。TIFF ビューア・プラグインを備える標準の Web ブラウザで、ファイルを表示できるようになります。
- ❖ カスタム変換を設定し、カスタム変換エンジンを作成する。



注意 : [OutSide In Image Export](#) を使用して Inbound Refinery で変換できるファイル形式の詳細は、『[Inbound Refinery 管理ガイド](#)』を参照してください。

さらに、Inbound Refinery では次の変換アドオンを使用できます。

❖ **PDF Converter:** ファイルを PDF (Portable Document Format) に変換し、PDF リーダー・プラグイン (Adobe Acrobat Reader など) を備える標準の Web ブラウザでファイルを表示できるようにします。ファイルを PDF に変換するには、3 つのオプションがあります。

- サード・パーティのアプリケーションを使用した PDF への変換 : PDF Converter を Windows で実行した場合、複数のサード・パーティ製アプリケーションを使用して、コンテンツ・アイテムの PDF ファイルを作成できます。通常は、ファイルを開いて印刷できるサード・パーティ製アプリケーションを使用してファイルを PostScript に印刷した後、構成済の PostScript Distiller エンジンを使用して PostScript ファイルを PDF に変換します。場合によっては、PDF Converter でサード・パーティ製アプリケーションを使用して、ファイルを PDF に直接変換することもできます。このオプションを使用するときは、PostScript Distiller エンジン、PostScript プリンタ、および変換時に使用するサード・パーティ製アプリケーションが必要です。
- OpenOffice を使用した PDF への変換 : PDF Converter を Windows または UNIX で実行した場合、OpenOffice を使用して一部のファイル・タイプを PDF に直接変換できます。このオプションを使用するときは、OpenOffice のみが必要です。
- Outside In を使用した PDF への変換 : Windows では、PDF Converter に付属する Outside In X を使用して、一部のコンテンツ・アイテムの PDF ファイルを作成できます。Outside In X を使用してファイルを PostScript に印刷した後、構成済の PostScript Distiller エンジンを使用して PostScript ファイルを PDF に変換します。このオプションを使用するときは、PostScript Distiller エンジンのみが必要です。



重要 : 変換で使用するサード・パーティのアプリケーション、PostScript Distiller エンジンおよび PostScript プリンタは、PDF Converter には付属していません。実行する変換に必要なすべてのサード・パーティ製アプリケーションおよび適当な PostScript Distiller エンジンと PostScript プリンタは、ユーザーが用意する必要があります。



注意 : PDF Converter で変換できるファイル形式の詳細は、『PDF Converter インストールガイド』を参照してください。

❖ **Tiff Converter:** TIFF (Tagged Image File Format) ファイルに固有の次の機能を使用できます。

- 単一ページまたは複数ページの TIFF ファイルからの、管理された PDF ファイルの作成。
- 単一の ZIP ファイルに圧縮されている複数の TIFF ファイルからの、管理された PDF ファイルの作成。
- TIFF から PDF への変換の際の OCR (Optical Character Recognition)。これにより、チェックインされる TIFF ファイル内のテキストの索引を作成でき、ファイルの全文検索を実行できるようになります。

Tiff Converter は Windows でのみサポートされています。



重要: Tiff Converter で OCR を使用して TIFF を PDF に変換するには、CVISION CVista PdfCompressor が必要です。PdfCompressor は Tiff Converter には付属していません。ユーザーが CVISION から PdfCompressor を入手する必要があります。詳細は、『Tiff Converter Installation and Administration Guide』を参照してください。

❖ **XML Converter:** Outside In XML Export、Search Export、および FlexionDoc スキーマまたは SearchML スキーマを使用して、ファイルを XML (eXtensible Markup Language) ファイルに変換します。



注意: XML Converter で変換できるファイル形式の詳細は、『XML Converter Installation and Administration Guide』を参照してください。

❖ **Digital Asset Manager:** 指定した形式とサイズでイメージおよびビデオを定義し、それを必要とする組織内のユーザーがダウンロードできるようにします。ブランド表記やデジタル・コンテンツの使用について、組織内で一貫した標準を維持するのに役立ちます。

Digital Asset Manager は、イメージやビデオが Content Server にチェックインされるときに、複数の形式のデジタル資産を自動的に作成し、1つのコンテンツ ID で形式の一覧を表示します。これにより、企業のロゴやプロモーション・ビデオなどの資産を組織で必要な複数の形式にしたときに、そのサイズと品質が維持されるだけでなく、Content Server のコンテンツ管理とワークフローの機能も提供されます。デジタル資産を探して使用する必要がある組織内のユーザーに対し、Digital Asset Manager は、承認された資産と形式を確実に使用できるようにします。たとえば、Web サイトで使用するためにロゴ・イメージをバンドルしてダウンロードしたりする場合、またはプレゼンテーションや紙のカタログで使用するために同じロゴ・イメージをダウンロードしてバンドルする場合など、すべての場合に、Content Server にチェックインされている単一のデジタル資産を利用できます。

デジタル資産は、組織内で複数の出力形式で使用できるようにする価値のある電子的な画像およびビデオです。各出力形式はレンディションと呼ばれます。レンディションの量と種類は、システム管理者がレンディション・セットで定義します。

ユーザーは、デジタル資産を Content Server にチェックインするときに、資産のレンディションの作成に使用するレンディション・セットを選択します。



注意: Digital Asset Manager で変換できるファイル形式の詳細は、『Digital Asset Manager インストールおよび管理ガイド』を参照してください。

このガイドについて

このインストール・ガイドでは、Microsoft Windows または UNIX を実行するコンピュータに Inbound Refinery 10g リリース 3 をインストールするために必要なすべての情報について説明します。サポートされるオペレーティング・システムの詳細は、2-2 ページの「[ソフトウェア要件](#)」を参照してください。

このドキュメントに記載されている情報は、製品の技術の進化、およびハードウェア、オペレーティング・システム、サード・パーティ製ソフトウェアの作成や変更に伴い、変更される場合があります。







重要: このソフトウェアのインストールを進める前に、ソフトウェアに付属するリリース・ノートをお読みください。インストールに関する最新の問題と考慮事項が記載されています。

表記規則

このガイドでは次の表記規則を使用します。

- ❖ スラッシュ (/) は、インターネット・アドレスの構成要素の区切りとして使用されます。たとえば、`http://www.google.com/maps` のように表記します。インターネット・アドレスの末尾には、スラッシュが付く場合と付かない場合があります。
- ❖ 円記号 (¥) は、Windows サーバー、ディレクトリ、またはファイルへのパスのレベルの区切りとして使用されます。たとえば、`C:¥ibr¥refinery¥` のように表記します。Windows サーバー、ディレクトリまたはファイル・パスの末尾には、常に円記号が付きます。
- ❖ スラッシュ (/) は、UNIX サーバー、ディレクトリ、またはファイルへのパスのレベルの区切りとしても使用されます。たとえば、`/usr/ibr/refinery` のように表記します。
- ❖ 文章内でファイル名とファイル・パスを示す場合は、`<path_to_directory>` ディレクトリの `<filename>` ファイル、のように表記します。
- ❖ `<refinery_install_dir>` という表記は、Inbound Refinery のメイン・インストール・ディレクトリの場所を参照するために使用されます。

- ❖ `<content_server_install_dir>` という表記は、Content Server のメイン・インストール・ディレクトリの場所を参照するために使用されます。
- ❖ 注意、技術ヒント、重要な通知、および警告には、次の表記規則が使用されます。

記号	説明
	これは注意です。情報に対し、特に注意を喚起するために使用されます。
	これは技術ヒントです。タスクを容易にするために使用できる情報を示すために使用されます。
	これは重要な通知です。必要な手順または必要な情報を示すために使用されます。
	これは警告です。データの損失または重大なシステム問題の原因となる可能性がある情報を示すために使用されます。

INBOUND REFINERY のドキュメント

Inbound Refinery には広範なオンライン・ヘルプ・システムおよび完全な PDF ドキュメント・セットが用意されています。

オンライン・ヘルプ・システム

Inbound Refinery のヘルプには、Inbound Refinery 管理インタフェースまたはリファイナリ・コンピュータのファイル・システムから次のようにアクセスできます。

- ❖ Inbound Refinery 管理インタフェースからヘルプを表示するには、ヘルプのリンクをクリックします。
- ❖ リファイナリ・コンピュータ・ファイル・システムからリファイナリ製品のヘルプを起動するには、次のディレクトリの `wh_start.htm` ファイルを開きます。

Windows: `<refinery_install_dir>%weblayout%help%`

UNIX: `<refinery_install_dir>/weblayout/help`



注意: コンテンツのオンライン・ヘルプ・システム表の「Welcome」リンクにより、ヘルプ・システムの使用に関する有用な情報が表示されます。

PDF ドキュメント

Inbound Refinery のドキュメントは、一連の PDF ファイルでも利用できます。すべての PDF ファイルは、Inbound Refinery ソフトウェアのインストール・ファイルに収められています。PDF ファイルのガイドも、Inbound Refinery ソフトウェアとともにインストールされます。

- ❖ リファイナリ製品のヘルプ・システムから PDF 版のガイドを表示するには、ヘルプ・ページの右上にある PDF アイコンをクリックします。
- ❖ リファイナリ・コンピュータ・ファイル・システムから PDF ファイルを表示するには、次のディレクトリに移動します。

Windows: <refinery_install_dir>\weblayout\help\documentation\

UNIX: <refinery_install_dir>/weblayout/help/documentation

2

インストール前の作業と 考慮事項

概要

Inbound Refinery をインストールする前に必要な作業と考慮事項は次のとおりです。

- ❖ [ハードウェア要件](#) (2-2 ページ)
- ❖ [ソフトウェア要件](#) (2-2 ページ)
- ❖ [Windows または UNIX に Inbound Refinery をインストールする場合の考慮事項](#) (2-13 ページ)
- ❖ [Inbound Refinery 環境の準備](#) (2-14 ページ)
- ❖ [Inbound Refinery のインストールとセットアップの概要](#) (2-18 ページ)

ハードウェア要件

Inbound Refinery 10g リリース 3 をインストールするコンピュータは、次のハードウェア要件を満たしている必要があります。

- ❖ **Windows:** Intel、AMD または x86 互換プロセッサを搭載する業界標準の PC
- ❖ **Sun Solaris:** Sun Microsystem SPARC
- ❖ **Linux Red Hat:** x86 ベースの PC
- ❖ **Linux SuSe:** x86 ベースの PC



重要: オペレーティング・システムが 32 ビット・モードの完全な機能を備えている場合は、Inbound Refinery は 64 ビット・ハードウェアでも動作します。

ソフトウェア要件

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ [オペレーティング・システム](#) (2-3 ページ)
- ❖ [Java 仮想マシン \(JVM\)](#) (2-6 ページ)
- ❖ [Web サーバー](#) (2-7 ページ)
- ❖ [Web ブラウザ](#) (2-10 ページ)
- ❖ [Content Server](#) (2-12 ページ)
- ❖ [X Server、Motif、LessTif](#) (2-12 ページ)



重要: オペレーティング・システム、Web サーバーおよびブラウザの技術的な特性のため、オラクル社は、サード・パーティ製品のすべてのバージョンと機能の互換性を保証することはできません。

オペレーティング・システム

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ サポートされるオペレーティング・システム (2-3 ページ)
- ❖ すべてのオペレーティング・システムに関する考慮事項 (2-4 ページ)
- ❖ Windows に関する考慮事項 (2-4 ページ)
- ❖ UNIX に関する考慮事項 (2-5 ページ)

サポートされるオペレーティング・システム

Inbound Refinery 10g リリース 3 は、次のオペレーティング・システムにインストールできます。



注意: これらのオペレーティング・システムの英語版のみがサポートされます。

Windows

- ❖ Windows 2000 Server Service Pack 4 (32 ビットのみ、x86)
- ❖ Windows Server 2003 Standard Edition Service Pack 1 (32 ビットのみ、x86)
- ❖ Windows Server 2003 Enterprise Edition Service Pack 1 (32 ビットのみ、x86)
- ❖ Windows Server 2003 R2 Standard Edition (32 ビットのみ、x86)
- ❖ Windows Server 2003 R2 Enterprise Edition (32 ビットのみ、x86)

UNIX

- ❖ Solaris 9 または 10 (Sun SPARC)
- ❖ Red Hat Enterprise Linux 3 または 4 (x86 上の AS)
- ❖ SuSe Linux Enterprise Server 9 (x86)



重要: Inbound Refinery は 32 ビット実行可能モジュールで構築され、32 ビット JVM を必要とするため、オペレーティング・システムは 32 ビット・モードの完全な機能を備えている必要があります。

すべてのオペレーティング・システムに関する考慮事項

サポートされるすべてのオペレーティング・システムについて、次のことを考慮してください。

- ❑ 特別な指定がないかぎり、このガイドでは、Windows と記述されている場合はサポートされるすべてのバージョンの Microsoft Windows オペレーティング・システムを表し、UNIX はサポートされるすべてのバージョンの UNIX オペレーティング・システムを表します。
- ❑ Inbound Refinery のインストールは、提供された配布メディアから行うことを強くお勧めします。ISO イメージをダウンロードした場合、インストールするには、CD に書き込むか、ISO イメージをマウントしてください。
- ❑ サポートされる厳密なバージョンの最新情報およびインストールに関する最新の考慮事項は、『DAM and Conversion 製品リリース・ノート』を参照してください。

Windows に関する考慮事項

Inbound Refinery を Windows にインストールする場合は、次のことを考慮してください。

- ❑ Windows 環境が必要な Service Pack レベルで稼働していること、および最新のクリティカル・パッチが適用されていることを確認してください。そうでない場合は、Inbound Refinery のインストールを続ける前に、Windows を更新してください。Microsoft Windows の Service Pack は、Microsoft のインターネット・サイト (<http://www.microsoft.com>) からダウンロードできます。または、地域の Microsoft 社の担当者に連絡してください。
- ❑ Inbound Refinery をインストールするコンピュータに対するローカル管理者権限が必要です。
- ❑ CD ドライブではなく共有ネットワークの場所から Inbound Refinery をインストールする場合は、ネットワークの場所にドライブ名を割り当てた後、そのドライブ名（たとえば、V:¥InboundRefinery¥win32¥setup.exe）を使用してソフトウェアをインストールしてください。そのようにしないと、インストールは失敗します。
- ❑ ターミナル・サービスを使用して Inbound Refinery をインストールすることもできます。
- ❑ 空白が含まれるディレクトリ（たとえば、C:¥IBR 10gR3）にインストール・ファイルをコピーし、そこからインストールを開始しないでください。ディレクトリ名に空白が含まれると、インストール・プロセスが正常に完了せず、特定の条件の下ではハングする可能性があります。

- ❑ ネイティブ・ファイルおよび Web 表示可能なファイルのリポジトリ（それぞれ、Vault と Web Layout）には、ローカル・ドライブを使用することをお勧めします。共有ネットワークの場所を使用する必要がある場合は、ネットワークの場所をマップしてドライブ名（X:¥Location）を使用するのではなく、UNC パス（¥¥Location）を使用してネットワークの場所を参照する必要があります。これは、別のソフトウェアを使用してドライブをサービスとしてマップしないかぎり、サーバーをログアウトするとマップされたドライブが切断されるためです。Inbound Refinery を、UNC の場所に対するアクセス権を持つ Microsoft ドメイン・ユーザーとして実行してください。
- ❑ Inbound Refinery をインストールする前に、すべての Windows プログラムを終了してください。

UNIX に関する考慮事項

Inbound Refinery を UNIX にインストールする場合は、次のことを考慮してください。

- ❑ UNIX オペレーティング・システムが最新の公式パッチで更新されていることを確認してください。
- ❑ Solaris の完全なインストールが必要です。エンドユーザー用または開発者用のインストールでは不十分です。
- ❑ 次の Solaris カーネル構成エントリを使用することで、Internet Explorer から Solaris で実行するリファイナリへのアップロードのパフォーマンスが向上します。

```
ndd -set /dev/tcp tcp_deferred_acks_max 0
ndd -set /dev/tcp tcp_deferred_ack_interval 10
```
- ❑ Linux に Inbound Refinery をインストールする場合は、C++ 下位互換性パッケージをサーバーに（および、Web サーバーが別のコンピュータで実行されている場合は Web サーバーにも）インストールしてください。そうしないと、Inbound Refinery のインストール時または Web サーバーの起動時に、エラーが発生する場合があります（たとえば、NativeOsUtils 例外や、共有オブジェクト・ファイルを開く際の失敗など）。通常、パッケージは `compat-<version_info>.rpm` または `compat-libstc++-<version_info>.rpm` という名前です。Linux のディストリビューション・メディアに収められています。

Java 仮想マシン (JVM)

Inbound Refinery 10g リリース 3 では、Web サーバーでサーバー側 Java プログラムを実行するために、Java 仮想マシン (JVM) が必要です。Windows または UNIX での新規インストールでは、別の JVM を使用することを指定しないかぎり、デフォルトで Sun JVM 1.5.0_07 が Inbound Refinery とともにインストールされます。更新の場合は、すでにコンピュータにある JVM を (現在の構成によっては) 使用できる可能性があります。

JVM については、次のことを考慮してください。

- ❑ Inbound Refinery に付属する JVM についてのみ、テストが行われています。Inbound Refinery のデフォルトの JVM を使用しない場合は、注意してください。Inbound Refinery をインストールする前に、JDK 1.4.2 または 1.5 に準拠する Java 仮想マシン (JVM) を Inbound Refinery システムにインストールしてください。テストされていない JVM を使用すると、Inbound Refinery が正しく機能しない可能性があります。
- ❑ Inbound Refinery では、32 ビットの JVM が必要です。
- ❑ Inbound Refinery に必要なバージョン以外の JVM がコンピュータに存在していても、必要な JVM を安全にインストールできます。同じコンピュータで複数の JVM が共存できます。
- ❑ x86 ベースのコンピュータの Linux に対するデフォルトの JVM は、Sun JVM 1.5 です。この JVM を使用し、IBM JVM は使用しないことをお勧めします (パフォーマンスの問題のため)。パフォーマンスの問題を許容できる場合は IBM JVM を使用してもかまいませんが、その場合は、<refinery_install_dir>/bin ディレクトリにある `intradoc.cfg` 構成ファイルに次の行を追加して、最適化をオフにする必要があります。
`JVMFLAGS=-Djava.compiler=off`
この変更を行った後は、忘れずに Inbound Refinery を再起動してください。
- ❑ Solaris の場合は、JVM 1.5 用の Solaris の正しいパッチをインストールする必要があります。

Web サーバー

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ サポートされる Web サーバー (2-7 ページ)
- ❖ すべての Web サーバーに関する考慮事項 (2-7 ページ)
- ❖ Microsoft インターネット・インフォメーション・サービス (IIS) に関する考慮事項 (2-8 ページ)
- ❖ Sun Java System Web Server に関する考慮事項 (2-8 ページ)
- ❖ Apache に関する考慮事項 (2-8 ページ)

サポートされる Web サーバー

Inbound Refinery 10g リリース 3 には Web サーバーが必要です。次の Web サーバーがサポートされます。

- ❖ Microsoft インターネット・インフォメーション・サービス (IIS) 5.0 または 6.0
- ❖ Sun Java System Web Server 6.1 (最新の Service Pack を適用済)
- ❖ Apache 2.0.x (2.0.55 以降) または 2.2.x

すべての Web サーバーに関する考慮事項

すべての Web サーバーについて、次のことを考慮してください。

- 英語以外のオペレーティング・システムを使用している場合は、国際化されたバージョンの Web サーバー・ソフトウェアを使用する必要があります。
- このドキュメントのインストール手順では、Web サーバーと同じ物理コンピュータ上に Inbound Refinery をインストールすることを想定しています。Inbound Refinery と Web サーバーを異なる物理システムに分散させることはできますが (分離インストール)、Inbound Refinery 10g リリース 3 ではこの構成はサポートされていません。
- Inbound Refinery をインストールする前に、Web サーバーのソフトウェアがインストールされて正常に動作していることを確認してください。
- Web サーバーをインストールするときに、次の情報を記録してください。Inbound Refinery のインストール時に尋ねられる場合があります。
 - フルパス (IIS の場合は必要ありません)
 - Web サーバー・ルート
 - 管理ユーザーの名前とパスワード

- ❑ Inbound Refinery のインストールの際に、DLL (Windows) またはファイル (UNIX) を上書きするかどうかを尋ねられる場合があります。その場合は、上書きを選択してください。
- ❑ Web サーバーのアプリケーション・セキュリティを強化するために設計された特定のサード・パーティ製品により、Inbound Refinery の機能が無効化される場合があります。特に、Inbound Refinery には長い CGI パラメータ (最大 20,000 文字になる場合があります) が必要であり、Inbound Refinery CGI URL パスには任意のパス接尾辞が必要であることを留意してください。
- ❑ サポートされる厳密なバージョンの最新情報およびインストールに関する最新の考慮事項は、『DAM and Conversion 製品リリース・ノート』を参照してください。

Microsoft インターネット・インフォメーション・サービス (IIS) に関する考慮事項

現時点では、Microsoft IIS に関して特別な考慮事項はありません。

Sun Java System Web Server に関する考慮事項

Sun Web Server の場合は、次のことを考慮してください。

- ❑ UNIX に Web サーバーをインストールするときは、root ユーザーを使用してください。
- ❑ 次の設定が行われていることを確認してください。
 - サーバーのユーザーを Inbound Refinery のユーザー・ログインに設定します。
 - バインド先アドレスを、Web サーバーの IP アドレスに設定します。
- ❑ 同じコンピュータに複数のリファイナリをインストールする場合は、リファイナリごとに Sun Web Server のインスタンスを個別に作成する必要があります。Web サーバーのインスタンスに 80 以外のポート番号を使用する場合は、Web サーバーの HTTP アドレスの一部として、ポート暗号を含める必要があります (例: server:81)。

Apache に関する考慮事項

Apache の場合は、次のことを考慮してください。

- ❑ Inbound Refinery 10g リリース 3 は、Apache 1.x をサポートしていません。
- ❑ UNIX にインストールする場合は、動的ロード可能モジュールのサポートを有効にします。具体的には、Apache サーバーのビルドを DSO モジュール化用に構成します。
- ❑ Apache 構成スイッチを設定します。

- 国際化環境で Apache 2.x を正しく機能させるには、Apache の AddDefaultCharset 構成設定の変更が必要な場合があります。一部のブラウザ（特に Mozilla ベースのブラウザ）では、ページで指定されているキャラクタ・セットで HTML ページが表示されない場合があります。これは、Apache には HTTP の Content-Type 戻りヘッダーを変更して Apache が返すすべてのページのキャラクタ・セットを指定する構成エントリがあり、一部のブラウザではページで指定されているキャラクタ・セットではなくヘッダーが信頼されるためです。Inbound Refinery のヘルプ・ページは標準の内部キャラクタ・セット・エンコーディングとして UTF-8 を使用するのので、このことが特に問題になる場合があります。この問題は、デフォルトのキャラクタ・セットが iso-8859-1 であるために、英語以外のサイトのみで発生する傾向があります。

この問題を回避するには、Apache の構成エントリ AddDefaultCharset を使用して、Web ページで指定されているキャラクタ・セットと一致させます。この値は、HTML タグの値 %pagecharset% を調べることで判別できます。

```
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=%pagecharset%">
```

Web サイトが複数のキャラクタ・セットでページを返す場合は、AddDefaultCharset を Off に設定するか、Location または Directory ディレクティブを使用してその有効範囲を指定します。ページのコンテンツのソースによっては、リファイナリは異なるキャラクタ・セットを使用する場合がありますことに注意してください。次に示すのは、ネイティブの SJIS キャラクタ・セットを使用する日本語リファイナリの構成の例です。

```
<Location /idcm1>
AddDefaultCharset shift_jis
</Location>

<Location /idcm1/help>
AddDefaultCharset utf-8
</Location>
```

ヘルプ・ページは、UTF-8 でエンコードされたページを提供するように個別に有効範囲を設定する必要があることに注意してください。

Web ブラウザ

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ [ブラウザに関する一般的な考慮事項](#) (2-10 ページ)
- ❖ [Windows クライアントで推奨されるブラウザ](#) (2-10 ページ)
- ❖ [UNIX クライアントで推奨されるブラウザ](#) (2-11 ページ)
- ❖ [Mac クライアントで推奨されるブラウザ](#) (2-11 ページ)

ブラウザに関する一般的な考慮事項

次の考慮事項は、すべてのクライアント・プラットフォームのすべての Web ブラウザに適用されます。

- この項で具体的に記述されているもの以外のブラウザまたはバージョンも動作する場合がありますが、問題が発生する可能性があります。このような問題は、通常、サポートされるレイアウトおよび高度なインタフェース機能（ビューに基づくオプション・リストなど）に関係しています。たとえば、一部のバージョンのブラウザでサポートされているのは、トレー・レイアウトや上部メニュー・レイアウトではなく、クラシック・レイアウトのみです。通常、これらのブラウザでは、ビューに基づくオプション・リストのオプションが表示されません。
- サポートされる厳密なバージョンの最新情報およびブラウザに関する最新の考慮事項は、『DAM and Conversion 製品リリース・ノート』を参照してください。

Windows クライアントで推奨されるブラウザ

Microsoft Windows オペレーティング・システムで動作するクライアント・コンピュータの Inbound Refinery 10g リリース 3 では、次の Web ブラウザを使用することをお勧めします。

- ❖ Microsoft Internet Explorer 7
- ❖ Firefox 2

Windows クライアントの Web ブラウザについては、次のことを考慮してください。

- Internet Explorer が Microsoft の JScript エンジンのバージョン 5.5 以上を使用していることを確認してください。そうでない場合は、JavaScript のレンダリング・エラー（Object Not Found など）が発生する可能性があります。Windows XP SP2 は JScript エンジン 5.6 を使用しています。

- リファイナリと同じコンピュータ上のInternet Explorer 7を使用してWindows Server 2003 上で動作するリファイナリにアクセスした場合、リファイナリに実際にアクセスできるまでに、多くのセキュリティ・プロンプトが表示されます。これは、Windows Server 2003 に組み込まれているセキュリティ機能のためです。これらのプロンプトが表示されないようにするには、Internet Explorer セキュリティ強化の構成を削除してください（「コントロールパネル」→「アプリケーションの追加と削除」→「Windows コンポーネントの追加と削除」を使用）。または、別の Web ブラウザ（Firefox など）を使用してリファイナリにアクセスするか、リファイナリとは異なるコンピュータの Internet Explorer 7 を使用してもかまいません。

UNIX クライアントで推奨されるブラウザ

UNIX ベースのオペレーティング・システムで動作するクライアント・コンピュータの Inbound Refinery 10g リリース 3 では、次の Web ブラウザを使用することをお勧めします。

- ❖ Firefox 2

現時点で、UNIX クライアントの Web ブラウザについては特別な考慮事項はありません。

Mac クライアントで推奨されるブラウザ

UNIX ベースのオペレーティング・システムで動作するクライアント・コンピュータの Inbound Refinery 10g リリース 3 では、次の Web ブラウザを使用することをお勧めします。

- ❖ Firefox 2
- ❖ Safari 2.04

Mac クライアントの Web ブラウザについては、次のことを考慮してください。

- Mac クライアントの使用に関する考慮事項については、ナレッジ・ベースの記事 p88005152 を参照してください。

Content Server

Inbound Refinery は、Content Server の 1 つまたは複数のインスタンスに対するプロバイダとして機能できます。Inbound Refinery 10g リリース 3 には、Content Server 10g リリース 3 が必要です。他のバージョンの Content Server でも Inbound Refinery を使用できる可能性はありますが、Content Server 10g リリース 3 のインスタンス以外で使った場合に Inbound Refinery 10g リリース 3 が正しく機能することを、オラクル社は保証できません。すべての機能が正しく動作するためには、Inbound Refinery のバージョン番号と Content Server のバージョン番号が同じである必要があります。たとえば、Inbound Refinery 10g リリース 3 (10.1.3.3.1) には、Content Server 10g リリース 3 (10.1.3.3.1) が必要です。

X Server、Motif、LessTif

UNIX で Inbound Refinery を実行し、複数ページの TIFF ファイルまたはサムネイルを作成すると、デフォルトで、Outside In Image Export は内部のグラフィック・コードを使用してフォントとグラフィックをレンダリングします。したがって、X Server、Motif、および LessTif は必要ありません。使用できるフォントが見つかるのみで十分です。

インストールの後で、Image Export が内部のグラフィック・コードではなくオペレーティング・システムのネイティブ・グラフィック・サブシステムを使用してフォントとグラフィックをレンダリングするように、Inbound Refinery を構成できます。その場合は、X Server、Motif、および LessTif が必要です。

UNIX でのレンダリング・オプションの構成の詳細は、『Inbound Refinery 管理ガイド』を参照してください。

WINDOWS または UNIX に INBOUND REFINERY をインストールする場合の考慮事項

Inbound Refinery 10g リリース 3 は、Windows または UNIX にインストールできます。Inbound Refinery 自体（つまり、変換アドオンがインストールされていない状態）は、Windows または UNIX のどちらにインストールしても、同じ機能を提供します。Inbound Refinery 10g リリース 3 で使用できる変換アドオンの機能はオペレーティング・システムにより異なり、一部のアドオンは Windows でのみサポートされます。Inbound Refinery を Windows または UNIX のどちらにインストールするかを決定するときは、各オペレーティング・システムでサポートされる機能を考慮してください。

製品	機能	Windows	UNIX
Inbound Refinery	Outside In Image Export を使用してサムネイルを作成する。	X	X
	Outside In Image Export を使用してファイルを複数ページの Tiff ファイルに変換する。	X	X
	カスタム変換を作成する。	X	X
PDF Converter	OpenOffice を使用してファイルを PDF に変換する。	X	X
	サード・パーティのアプリケーションと PostScript から PDF の変換を使用して、ファイルを PDF に変換する。	X	
	Outside In X と PostScript から PDF の変換を使用して、ファイルを PDF に変換する。	X	
Tiff Converter	CVISION CVista PdfCompressor を使用して、単一ページまたは複数ページの TIFF ファイルを単一の PDF ファイルに変換する。	X	
	CVISION CVista PdfCompressor を使用して、単一の ZIP ファイルに圧縮されている複数の TIFF ファイルを単一の PDF ファイルに変換する。	X	
	CVISION CVista PdfCompressor を使用して、TIFF から PDF への変換中に OCR を実行する（テキストの索引作成のため）。	X	
XML Converter	Outside In XML Export、Search Export および FlexionDoc スキーマまたは SearchML スキーマを使用して、ファイルを XML に変換する。	X	X

INBOUND REFINERY 環境の準備

Inbound Refinery をインストールする前に、次の各タスクと考慮事項を読み、理解し、それに従ってください。

- ❑ Inbound Refinery 10g リリース 3 は、英語のユーザー・インタフェースでインストールされます。ローカライズされた（つまり英語以外の）ユーザー・インタフェースは提供されていません。
- ❑ Inbound Refinery の対象のコンピュータがすべてのハードウェア要件を満たしていることを確認してください。詳細は、2-2 ページの「[ハードウェア要件](#)」を参照してください。
- ❑ サポートされるオペレーティング・システムおよび必要なすべてのサービス・パックと更新が、Inbound Refinery の対象のコンピュータにインストールされて動作していることを確認してください。詳細は、2-3 ページの「[オペレーティング・システム](#)」を参照してください。
- ❑ Java 仮想マシン (JVM) に関するすべての考慮事項を読んで理解してください。詳細は、2-6 ページの「[Java 仮想マシン \(JVM\)](#)」を参照してください。
- ❑ Windows に Inbound Refinery をインストールするときは、すべての Windows プログラムを終了してからインストールを行ってください。
- ❑ Windows での Inbound Refinery のインストール時に、一部の Inbound Refinery ディレクトリのアクティブなウイルス・スキャンのために、変換が失敗する場合があります。詳細は、『[Inbound Refinery 管理ガイド](#)』を参照してください。
- ❑ Windows に Inbound Refinery をインストールするときは、Inbound Refinery と変換アドオンのインストール、すべての必要なサード・パーティ製アプリケーションのインストール、および Inbound Refinery の実行に、同じユーザーを使用する必要があります。

Windows ユーザー名: _____

Windows パスワード: _____



重要: サービスとして Inbound Refinery を実行する場合は、このユーザーを使用してサービスを実行（サービスとしてログオン）する必要があります。したがって、このユーザーは Windows サービスとしてログオンする権限を付与されている必要があります。インストール時にリファイナリ・サービスを作成する場合は、インストールの前に、サービスとしてログオンするための権限をユーザーに付与する必要があります。そうでないと、インストールは正常に完了しません。

- UNIX に Inbound Refinery をインストールするときは、Inbound Refinery に対する UNIX ログインを、Web サーバーに対する Server User ログインと同じにすることを推奨します（少なくとも、同じグループにする必要があります）。これらのログインを同じにすることで、ユーザーがオペレーティング・システムからセキュアなドキュメントにアクセスすることを防ぐことができます。

UNIX ユーザー名 : _____

UNIX パスワード : _____

UNIX グループ : _____



注意: UNIX のユーザー名は 8 文字以下にします。

次の手順を行って、UNIX ログインに対する Inbound Refinery ユーザー・プロフィールを作成します。

1. すべてのファイルを作成するための `umask` をモード 775 に設定します。

```
umask 002
```

2. 使用しやすいパスを設定します。

```
set path=(/bin /usr/bin sbin /usr/sbin /usr/ccs/bin
/usr/local/bin /usr/openwin/bin /usr/dt/bin)
```

すべてを 1 行で入力してください。

Inbound Refinery の UNIX ログインのホーム・ディレクトリは、Inbound Refinery のインストール中に示されるデフォルトの場所です。

- 後続の項で説明する標準のインストール手順では、同じコンピュータ上のすべてのコンテンツ・サーバーとリファイナリに対して同じ UNIX ユーザー ID が使用されます。このように構成することで、1 つの管理サーバーが、すべてのコンテンツ・サーバーとリファイナリの起動、停止および構成を簡単に制御できます。

ただし、製品とは関係のない理由（個別にディスク・クォータを割り当てるなど）により、各コンテンツ・サーバーとリファイナリに異なるユーザー ID を使用する場合があります。

その場合は、インストーラが新しいリファイナリに対して管理サーバーを構成できるよう、管理サーバーをインストールしたユーザーと同じユーザー ID で各リファイナリをインストールすることをお勧めします。インストールが完了した後で、UNIX のスーパーユーザーは、インストール全体に対して `chown(1)` を実行し、リファイナリが実行するときに使用するユーザー ID に変更できます。異なるユーザー ID で実行しているリファイナリを管理サーバーで開始、停止または再構成できるようにするには、`admin/bin/UnixProcCtrl` ファイルを UNIX のスーパーユーザーが所有し、`setuid` に設定する必要があります。

次に例を示します。

```
% cd [Admin_Server_Install_Dir]/admin/bin
% su
Password: [Superuser_Password]
# chown 0 UnixProcCtrl
# chmod 4550 UnixProcCtrl
# exit
%
```

- ❑ **Inbound Refinery** をインストールする前に、Web サーバーのソフトウェアがインストールされて正常に動作していることを確認し、フルパスを記録してください（IIS の場合は必要ありません）。

Web サーバーのパス : _____

- ❑ Web サーバーのルートを確認して記録します。**Inbound Refinery** のインストール中に要求される場合があります。

Web サーバー・ルート : _____

- ❑ **Inbound Refinery** のコンピュータおよびリファイナリがプロバイダであるコンテンツ・サーバーを実行している各コンピュータの、ネットワーク IP アドレス（例：61.45.14.104）を確認します（localhost の IP アドレス 127.0.0.1 では不十分です）。リファイナリが正常に通信できるためには、これらのアドレスをリファイナリの IP セキュリティ・フィルタに追加する必要があります。インストールの後でリファイナリの IP セキュリティ・フィルタを変更することもできます。

リファイナリのコンピュータの IP アドレス : _____

コンテンツ・サーバーのコンピュータの IP アドレス : _____

- ❑ ネイティブ・ファイル・リポジトリ（Vault）と Web 表示可能ファイル・リポジトリ（Web Layout）を配置する場所を決定します。**Inbound Refinery** のインストール中に、これらの場所のパス名の指定を求められます。これらのディレクトリが **Inbound Refinery** の他の部分とは異なるシステムにある場合は、ドライブがアクセス可能であり、適切な権限があることを確認します。



注意: ネイティブ・ファイルおよび Web 表示可能なファイルのリポジトリには、ローカル・ドライブを使用することをお勧めします。共有ネットワークの場所を使用する必要がある場合は、ネットワークの場所をマップしてドライブ名 (X:¥Location) を使用するのではなく、UNC パス (¥¥Location) を使用してネットワークの場所を参照する必要があります。これは、別のソフトウェアを使用してドライブをサービスとしてマップしないかぎり、サーバーをログアウトするとマップされたドライブが切断されるためです。Inbound Refinery を、UNC の場所に対するアクセス権を持つ Microsoft ドメイン・ユーザーとして実行してください。

ネイティブ・ファイル・リポジトリ (Vault) : _____

Web 表示可能ファイル・リポジトリ (Web Layout) : _____

- リファインリのポート番号を確認します。Inbound Refinery のインストール中に要求される場合があります。
同じコンピュータで複数のリファインリ・インスタンスを使用する場合は、インスタンスごとに異なるポート番号を使用する必要があります。

リファインリのポート番号: _____

- 管理サーバーのポート番号を確認します。Inbound Refinery のインストール中に要求される場合があります。
同じコンピュータで複数の管理サーバーを使用する場合は、インスタンスごとに異なるポート番号を使用する必要があります。

管理サーバーのポート番号: _____

- Windows コンピュータに Inbound Refinery をインストールし、それが UNIX コンピュータ上のコンテンツ・サーバーに対するプロバイダであり、重いバッチ負荷または多数のチェックイン・アクティビティが予想される場合は、ファイル・サービスに Samba を使用することをお勧めします。テストにおいて、高い信頼性が証明されています。Samba は、インターネットの <http://us2.samba.org/samba/> からダウンロードできます。

INBOUND REFINERY のインストールとセットアップの概要

10g リリース 3 のリファイナリをインストールしてコンテンツ・サーバー用のファイルの変換を開始するために必要な基本手順の概要を次に示します。

1. リファイナリをインストールします。詳細は、[第 3 章「Inbound Refinery のインストール」](#)を参照してください。
 - ❖ インストール中に、同じコンピュータ上のコンテンツ・サーバーに対するプロバイダとしてリファイナリを追加するように指定し、そのコンテンツ・サーバーでリファイナリの認証を管理できます（コンテンツ・サーバーがリファイナリのユーザー・ベースを所有します）。
 - ❖ また、インストールの後で、同じコンピュータまたは別のコンピュータのコンテンツ・サーバーに対するプロバイダとして、リファイナリを追加することもできます。詳細は、『[Inbound Refinery 管理ガイド](#)』を参照してください。
 - ❖ インストール中に、リファイナリの管理サーバーをインストールすることも、同じコンピュータ上の既存の管理サーバーにリファイナリを追加することもできます。
 - ❖ また、インストールの後で既存の管理サーバーにリファイナリを追加することもできます。詳細は、『[Inbound Refinery 管理ガイド](#)』を参照してください。
2. インストールのログ・ファイルを確認します。詳細は、[4-2 ページの「インストール・ログ・ファイル」](#)を参照してください。
3. リファイナリがプロバイダである各コンテンツ・サーバーに、`InboundRefinerySupport` コンポーネントをインストールします。詳細は、[4-2 ページの「Content Server への InboundRefinerySupport コンポーネントのインストール」](#)を参照してください。
4. リファイナリのインストール中に行ったインストールに関する選択および Web サーバーによっては、リファイナリで使用するよう Web サーバーをセットアップおよび構成するために、いくつかの作業を行うことが必要になる場合があります。詳細は、[4-5 ページの「Web サーバーの構成」](#)を参照してください。
5. 定期的に、既存の 10g リリース 3 リファイナリを新しいビルドに更新することが必要になる場合があります。詳細は、[第 6 章「既存の Inbound Refinery の更新」](#)を参照してください。
6. リファイナリのインストールが完了した後で、次の設定が必要です。
 - ❖ インストール中にコンテンツ・サーバーに対するプロバイダとしてリファイナリを追加しなかった場合は、インストールの後で行う必要があります。新しいコンテンツ・サーバーに対するプロバイダとしてリファイナリを追加することもできます。

- ❖ 変換ジョブをリファイナリに送信するよう、各コンテンツ・サーバーを構成する必要があります。
- ❖ 変換ジョブを受け付けるようにリファイナリを構成し、変換の設定を構成する必要があります。

詳細は、『Inbound Refinery 管理ガイド』を参照してください。

インストール前の作業と考慮事項

3

INBOUND REFINERY のインストール

概要

Inbound Refinery のインストール手順は、選択するインストール方法によって異なります。

- ❖ [コマンドラインのインストール](#) (3-2 ページ)
このインストール方法では、テキストベースのコマンドライン・インタフェースを使用して Inbound Refinery をインストールします。
- ❖ [自動インストール](#) (3-10 ページ)
このインストール方法では、スクリプト・ファイルを使用して Inbound Refinery をインストールします。インストーラによって実行され、ユーザーの操作は必要ありません。



重要: ここで説明する手順は、Inbound Refinery 10g リリース 3 を新しくインストールする場合にのみ適用されます。Inbound Refinery 10g リリース 3 インスタンスの更新の詳細は、[第 6 章「既存の Inbound Refinery の更新」](#)を参照してください。

コマンドラインのインストール

このインストール方法では、テキストベースのコマンドライン・インタフェースを使用して **Inbound Refinery** をインストールします。次のことを考慮してください。

- ❖ このドキュメントのインストール手順では、Web サーバーと同じシステム上に **Inbound Refinery** をインストールすることを想定しています。
- ❖ 後述するインストール手順では、**[Enter]** を押すことでデフォルトを使用できます。このことは、大カッコ ([]) またはアスタリスク (*) で示されています。
- ❖ **Windows** にインストールする場合であっても、パスを指定する必要があるときは、常にスラッシュ (/) を使用するようになしてください (例: `c:/ucm/ref1/`)。
- ❖ 各リファイナリのインストールに対して入力するすべての値は、一意である必要があります。
- ❖ **[Ctrl]** キーを押しながら **[C]** キーを押してインストールを開始する前であれば、いつでもインストール手順を中止できます。

コマンドライン・インタフェースを使用して **Inbound Refinery** をインストールするには、次の手順を実行します。

1. **Inbound Refinery** コンピュータにログインします。 **Inbound Refinery** のインストールと実行に使用するユーザー・アカウントに留意してください。詳細は、2-14 ページの「[Inbound Refinery 環境の準備](#)」を参照してください。
2. **Windows** にリファイナリをインストールする場合は、他のすべての **Windows** プログラムを閉じます。
3. コマンド・プロンプトまたはシェル・ウィンドウを開き、**Inbound Refinery** 配布メディアの **Inbound Refinery** インストール・ディレクトリに移動します。
4. インストーラを起動します。
 - ❖ **Windows:** `Installer` と入力して、**[Enter]** を押します。
 - ❖ **UNIX:** `sh ./setup.sh` と入力して、**[Enter]** を押します。



注意: インストーラに対してコマンドライン・パラメータを指定し、インストールのデフォルト設定を無効にすることができます。たとえば、デフォルトで実施される初期システム・チェックをオフにできます。詳細は、A-13 ページの「[スクリプト・ファイルのエントリの変更](#)」を参照してください。

5. インストール手順の言語の選択を求められます。リストから言語を選択し、**[Enter]** を押します。
6. インストール・オプションのメニューが表示されます。新しく **Inbound Refinery** をインストールするには、`1` と入力して **[Enter]** を押します。

7. 新しいリファイナリのターゲット・インストール・ディレクトリのフルパスの入力を求められます。有効なインストール・ディレクトリのパスを入力するか、デフォルトのままにして、[Enter] を押します。存在しないディレクトリを指定した場合は、ディレクトリを作成するかどうかを尋ねられます。[1] または [Enter] を押して確認します。



重要: 空白を含むディレクトリ・パスは指定できません。

8. 新しいリファイナリで使用する Java 仮想マシン (JVM) の指定を求められます。[1] または [Enter] を押すと、デフォルトの JVM がインストールされます。[2] を押すと、カスタム JVM を指定できます。JVM の実行可能ファイルのフルパスを入力して、[Enter] を押します。デフォルトおよびカスタム JVM の詳細は、2-6 ページの「[Java 仮想マシン \(JVM\)](#)」を参照してください。
9. 新しいリファイナリのネイティブ・ファイル・リポジトリ (Vault) の場所の指定を求められます。これは、Inbound Refinery が変換用にネイティブ・ファイルを一時的に保管する場所です。有効なディレクトリのパスを入力するか、デフォルトのままにして、[Enter] を押します。存在しないディレクトリを指定した場合は、ディレクトリを作成するかどうかを尋ねられます。[1] または [Enter] を押して確認します。



重要: 空白を含むディレクトリ・パスは指定できません。

10. 新しいリファイナリの Web 表示可能ファイル・リポジトリ (Web Layout) の場所の指定を求められます。これは、Inbound Refinery が静的なリファイナリ Web ページを格納する場所です。有効なディレクトリのパスを入力するか、デフォルトのままにして、[Enter] を押します。存在しないディレクトリを指定した場合は、ディレクトリを作成するかどうかを尋ねられます。[1] または [Enter] を押して確認します。



重要: 空白を含むディレクトリ・パスは指定できません。

11. 同じコンピュータ上の既存のローカル・コンテンツ・サーバーに対するプロバイダとしてリファイナリを構成し、そのコンテンツ・サーバーでリファイナリの認証を管理する (コンテンツ・サーバーがリファイナリのユーザー・ベースを所有する) かどうか選択するよう求められます。ローカル・コンテンツ・サーバーに対するプロバイダとしてリファイナリを構成することを選択すると、ローカル・コンテンツ・サーバーのパス (例: `c:/ucm/cs1/`) の入力を求められます。また、インストールの後で、同じコンピュータまたは別のコンピュータのコンテンツ・サーバーに対するプロバイダとして、リファイナリを追加することもできます。詳細は、『Inbound Refinery 管理ガイド』を参照してください。

12. リファイナリを管理するために管理サーバーをインストールして構成するか、または同じコンピュータ上の既存の管理サーバーにリファイナリを追加するかの選択を求められます。既存の管理サーバーを構成してリファイナリを管理することを選択すると、管理サーバーのパス（例：`c:/ucm/cs1/admin/`）の入力を求められます。また、インストールの後で既存の管理サーバーにリファイナリを追加することもできます。詳細は、『Inbound Refinery 管理ガイド』を参照してください。
13. Web ブラウザの実行可能ファイルの場所の指定を求められます。このブラウザは、オンライン・ヘルプを表示するために使用されます（リファイナリと同じコンピュータで呼び出す場合）。ブラウザの場所のパスを指定するか、デフォルトのままにして（コンピュータのデフォルト・ブラウザへのパス）、**[Enter]** を押します。
14. リファイナリのシステム・ロケールの指定を求められます。システム・ロケールでは、日時の形式、デフォルトのタイム・ゾーン、デフォルトのインタフェースなど、言語固有の問題をリファイナリが処理する方法が定義されています。リストからロケールを選択し、**[Enter]** を押します。



注意：リファイナリのシステム・ロケールは、システム・プロパティ・ユーティリティを使用していつでも変更できます。

15. リファイナリが動作するタイム・ゾーンの指定を求められます。デフォルト（オペレーティング・システムのタイム・ゾーン設定）のままにするか、他の地域を選択して、**[Enter]** を押します。他の地域を選択すると、リファイナリが動作するタイム・ゾーンの指定を求められます。リストからタイム・ゾーンを選択し、**[Enter]** を押します。表示されるリストに目的のタイム・ゾーンが含まれない場合は、**[m]** を押すと他の選択肢が表示されます。
16. リファイナリのポート番号の入力を求められます。デフォルトのポートは 5555 です。これには、他で使用されていないポートで、同じコンピュータ上のコンテンツ・サーバーまたはリファイナリごとに一意のものを指定する必要があります。ポート番号を指定するか、**[Enter]** を押してデフォルトを使用します。すでに使用されているポート番号を指定すると、ポート番号を再度入力するように求められます。
17. リファイナリの IP アドレス・セキュリティ・フィルタの指定を求められます。このフィルタは、リファイナリへのアクセスを制限するために使用されます。指定した条件に一致する IP アドレスのホストのみが、リファイナリへのアクセスを許可されます。デフォルトは 127.0.0.1（ローカル・ホスト）ですが、有効な IP アドレスをいくつでも追加できます。複数の IP アドレスを指定するには、縦棒（|）で区切ります。また、ワイルドカード（0 個以上の文字には*、1 文字には?）を使用できます。例：`127.0.0.1|10.10.1.10|62.43.163.*|62.43.161.12?`

コンテンツ・サーバーが同じ物理コンピュータの場合でも、リファイナリが変換を実行する対象のコンテンツ・サーバー・コンピュータのネットワーク IP アドレスを、IP アドレス・セキュリティ・フィルタに含める必要があります。この場合、ローカル・ホストの IP アドレス (127.0.0.1) では十分ではありません。また、他の IP アドレスに加えて、ローカル・ホストの IP アドレス (127.0.0.1) も常に IP アドレス・セキュリティ・フィルタに含めてください。



注意: リファイナリの IP アドレス・セキュリティ・フィルタは、インストールの後で変更できます。詳細は、『Inbound Refinery 管理ガイド』を参照してください。

終了したら、[Enter] を押します。

18. リファイナリの URL 接頭辞 (Web サーバー相対ルート) の指定を求められます。Web サーバーの相対ルートを指定するか、デフォルトのままにして、[Enter] を押します。別のインスタンスがすでに使用している URL 接頭辞を指定すると、URL 接頭辞を再度入力するように求められます。



注意: URL 接頭辞は、インストール内の weblayout ディレクトリのコンテンツを参照する HTML ページを生成するときに使用されます。この接頭辞は、Web サーバー内で、weblayout ディレクトリの物理的な場所にマップされる必要があります。

19. Web サーバーの HTTP アドレスの指定を求められます。Web サーバーの HTTP アドレス (例: web.company.com) を指定するか、デフォルト (検出されたコンピュータ名) のままにして、[Enter] を押します。



注意: ここで指定したアドレスは、HTML ページを生成するときに使用されます。たとえば、web.company.com を使用して http://web.company.com/ref1 のような URL が参照されます。



重要: Web サーバーが 80 以外のポートで動作している場合は、HTTP アドレスの後にコロンとポート番号を付加する必要があります (例: web.company.com:81)。

20. リファイナリの名前の指定を求められます。この名前は、企業全体で一意である必要があります。名前を指定するか、デフォルトのままにして、[Enter] を押します。
21. リファイナリの短いラベル (例: ref1) の指定を求められます。このラベルは、Web ページでそのインスタンスを識別するために使用されます。ラベルに使用できる文字数は 12 文字以下です。ラベルを指定して、[Enter] を押します。
22. リファイナリの長い説明の指定を求められます。説明 (例: Inbound Refinery refinery_1) を指定して、[Enter] を押します。

23. リファイナリとともに使用する Web サーバーの指定を求められます。サポートされる Web サーバーのリストが表示されます。Web サーバーの手動構成を選択することもできます。リストからオプションを選択し、[Enter] を押して続行します。



注意: Web サーバーを手動で構成する場合の詳細は、[付録 B 「Web サーバーの手動セットアップ」](#) を参照してください。

- a. Web サーバーとして Microsoft IIS 5.0/6.0 を選択し、ファイル処理キャッシュが有効になっている場合は、無効にするかどうかの指定を求められます。Web サイトでロックされているファイルを、Web サーバーから競合なしに動的に更新できるように、無効にすることをお勧めします。[1] (はい) または [2] (いいえ) を押し、[Enter] を押して続行します。
- b. Web サーバーとして Microsoft IIS 5.0/6.0 を選択した場合、IIS で使用するセキュリティ・モデルの指定を求められる場合があります (設定されていない場合)。
 - **標準セキュリティ:** 標準セキュリティを手動で設定します。ユーザー、ロール、アカウントの情報を、Windows NT セキュリティとは別に設定する必要があります。
 - **NTLM セキュリティ:** このオプションは、IIS とともに Microsoft Internet Explorer を使用している場合にのみ選択します。ユーザー、ロール、アカウントの情報は、Microsoft ネットワーク・セキュリティからマップされます。このオプションは、単一ソースでのユーザー管理を行うサイトおよび複雑なセキュリティ・モデルに対して便利です。このオプションを指定する場合、コア・コンポーネントをインストールするサーバーは、Microsoft ネットワーク・セキュリティ・ドメインに参加している必要があります。スタンドアロン・サーバーまたはワークグループのみに参加しているサーバーでは使用できません。つまり、Microsoft ネットワーク・サーバーが他に存在しない場合、そのサーバーはプライマリ・ドメイン・コントローラである必要があります。
 - **ADSI セキュリティ:** Active Directory Services Interface (ADSI) を使用してセキュリティを実現します。

[1] (標準)、[2] (NTLM) または [3] (ADSI) を押し、[Enter] を押して続行します。



重要: Oracle Inbound Refinery 10g リリース 3 は、Microsoft Windows Server 2003 での NTLM をサポートしません。ユーザーを集中管理する場合は、Active Directory Services Interface (ADSI) の使用をお勧めします。

- c. Web サーバーとして Sun ONE を選択した場合は、リファイナリで使用する Sun Web Server の完全なディレクトリ・パスの指定を求められます。Web サーバーの完全なディレクトリ・パスを入力し、[Enter] を押して続行します。



注意: 指定するディレクトリには、`obj.conf` および `magnus.conf` というファイルを含む `config` という名前のサブディレクトリが含まれている必要があります。インストーラは、インストール・ディレクトリの `install` サブディレクトリに、`obj.conf` ファイルと `magnus.conf` ファイルを新しく作成します。可能な場合は、これらのファイルが自動的にインストールされます。元の `obj.conf` ファイルと `magnus.conf` ファイルの名前は、それぞれ、`install/obj.conf.orig` および `install/magnus.conf.orig` に変更されます。

24. Windows に管理サーバーをインストールする場合は、Administration Server サービスの構成方法の指定を求められます。サービスをインストールして自動的に開始する、インストールのみ行う（手動で開始する）、インストールしない、のいずれかを選択できます。オプションを選択し、[Enter] を押して続行します。



注意: サービスをインストールしないことを選択した場合は、管理サーバーを起動するまで、Web ブラウザのインターフェースを使用してリモートで管理タスクを実行することはできません。

Administration Server サービスのインストールを選択した場合は、次の指定を求められます。

a. 特定のユーザーとして実行するようにサービスを構成するかどうか。

「yes」を選択すると、ユーザー名とパスワードの入力を求められます。「yes」を選択し、Inbound Refinery とその変換アドオンおよびすべての必要なサード・パーティ・アプリケーションのインストールに使用するユーザーと同じユーザーとして、サービスを実行することをお勧めします。

ユーザー名の構文が正しいことを確認します。

ローカル・ユーザー名の構文: `.[username]`

ドメイン・ユーザー名の構文: `[domain].[username]`

「no」を選択すると、サービスは Local System として実行するように構成されます。



重要: 特定のユーザーとして実行するようサービスを構成する場合（推奨）、このユーザーは Windows サービスとしてログオンする権限を付与されている必要があります。インストールを行う前にこの権限を付与しないと、インストールは正常に完了しません。

b. サービスを別のサービスに依存するように構成する必要があるかどうか。「yes」を選択すると、Administration Server サービスが依存するサービスの名前の入力を求められます。

25. Windows にリファイナリをインストールする場合は、リファイナリ・サービスの構成方法の指定を求められます。サービスをインストールして自動的に開始する、インストールのみ行う（手動で開始する）、インストールしない、のいずれかを選択できます。オプションを選択し、[Enter] を押して続行します。



注意: サービスをインストールしない場合、(Windows の「スタート」メニューまたはコマンドラインから) アプリケーションとしてのみリファイナリを起動できます。

リファイナリ・サービスのインストールを選択した場合は、次の指定を求められます。

- a. 特定のユーザーとして実行するようにサービスを構成するかどうか。「yes」を選択すると、ユーザー名とパスワードの入力を求められます。「yes」を選択し、Inbound Refinery とその変換アドオンおよびすべての必要なサード・パーティ・アプリケーションのインストールに使用するユーザーと同じユーザーとして、サービスを実行することをお勧めします。

ユーザー名の構文が正しいことを確認します。

ローカル・ユーザー名の構文: .¥[username]

ドメイン・ユーザー名の構文: [domain]¥[username]

「no」を選択すると、サービスは Local System として実行するように構成されます。



重要: 特定のユーザーとして実行するようサービスを構成する場合（推奨）、このユーザーは Windows サービスとしてログオンする権限を付与されている必要があります。インストールを行う前にこの権限を付与しないと、インストールは正常に完了しません。

- b. サービスを別のサービスに依存するように構成する必要があるかどうか。「yes」を選択すると、リファイナリ・サービスが依存するサービスの名前の入力を求められます。

26. Windows にリファイナリをインストールしている場合は、8.3 形式のファイル名の作成を無効にするかどうかの指定を求められる場合があります（まだ設定されていない場合）。[1]（はい）または [2]（いいえ）を押し、[Enter] を押して続行します。



警告: Inbound Refinery の実行専用のシステムの場合は、8.3 形式のネーミング規則を無効にします。本番用のすべてのシステムは、Inbound Refinery の実行専用にする必要があります。

Inbound Refinery の実行専用ではないシステムの場合は、8.3 形式のネーミング規則のオプションを無効にしないでください。これにより、そのシステムにインストール済の 8.3 形式のネーミング規則を必要とする他の製品が、正しく機能するようになります。Inbound Refinery の実行専用ではないシステムは、デモンストレーション・システムまたは開発システムとして使用できます。

27. インストーラは、インストール前のいくつかのチェックを実行します。エラーまたは警告がある場合は報告されます。インストールの設定を確認し、インストールを続行するか、中止するか、構成を変更するかを指定します。構成を再チェックすることもできます。これにより、インストールを続ける前に、報告されたエラーを修正できます。準備ができたなら、メニュー・オプションを選択して **[Enter]** を押しします。
28. インストールの続行を選択すると、すべてのファイルがコピーされて、構成の設定が行われます。処理が行われている間、メッセージ行に、完了した処理の割合と、現在実行されているタスクの簡単な説明が表示されます。
29. Inbound Refinery をインストールした後は、次のことを確認してください。
 - ❖ Inbound Refinery をインストールした後で必要なタスクと考慮事項がいくつかあります。たとえば、リファイナリがプロバイダとなる（つまり、リファイナリが変換ジョブを実行する）各コンテンツ・サーバーに InboundRefinerySupport コンポーネントをインストールすることなどです。
詳細は、[第 4 章「インストール後の作業と考慮事項」](#) を参照してください。



重要: 既存のローカル・コンテンツ・サーバーに対するプロバイダとしてリファイナリを構成する場合は、先に InboundRefinerySupport コンポーネントをコンテンツ・サーバーにインストールしておかないと、リファイナリに正常にログインできません。

- ❖ リファイナリの起動と停止およびリファイナリへのログオンの詳細は、[第 5 章「リファイナリの起動と停止」](#) を参照してください。
- ❖ インストールした後のリファイナリの設定と管理の詳細は、『Inbound Refinery 管理ガイド』を参照してください。

自動インストール

Inbound Refinery は自動インストールをサポートします。自動インストールは、基本的に、パラメータとして特定のスクリプト・ファイルを使用するコマンドライン・インストールです。この方法を使用すると、まったく同じインストール設定を使用して、複数のコンピュータに Inbound Refinery をインストールおよびセットアップできます。インストール・プロセスの開始以外に、ユーザーが操作する必要はありません。

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ [スクリプト・ファイルの作成](#) (3-10 ページ)
- ❖ [自動インストールの実行](#) (3-11 ページ)

スクリプト・ファイルの作成

自動インストールを実行する前に、必要なインストール・パラメータをすべて含むスクリプト・ファイルを作成する必要があります。このファイルを作成する最も簡単な方法は、Inbound Refinery ソフトウェアのコマンドライン・インストールを、最終確認手順まですべて通して行うことです。これより先には進まないでください。かわりに、インストールを中止して、`<refinery_install_dir>/install` ディレクトリに移動します。インストーラにより、Inbound Refinery ソフトウェアのインストールに使用される予定だったスクリプト・ファイルが生成されています。生成されるスクリプト・ファイルの名前は、`[date]-[type].txt` です。[date] は当日の日付、[type] はインストールの種類 (new または update) です。たとえば、`2003-08-21-new.txt` のような名前になります。

スクリプト・ファイルが作成されたら、簡単にそれを変更して再利用できます。



注意: スクリプト・ファイルの作成と変更の詳細は、[付録 A 「インストール・スクリプト・ファイル」](#) を参照してください。

自動インストールの実行

自動インストールを使用して Inbound Refinery をインストールするには、次の手順を実行します。

1. Inbound Refinery コンピュータにログインします。Inbound Refinery のインストールと実行に使用するユーザー・アカウントに留意してください。詳細は、2-14 ページの「[Inbound Refinery 環境の準備](#)」を参照してください。
2. Windows にインストールする場合は、他のすべての Windows プログラムを閉じます。
3. コマンド・プロンプトまたはシェル・ウィンドウを開き、Inbound Refinery 配布メディアの Inbound Refinery インストール・ディレクトリに移動します。
4. インストーラを起動します。

- ❖ **Windows:** Installer に続けて使用するスクリプト・ファイルの名前を入力し（必要な場合はフルパスで）、[Enter] を押します。次に例を示します。

```
Installer c:\scripts\install.txt
```

- ❖ **UNIX:** sh ./setup.sh に続けて使用するスクリプト・ファイルの名前を入力し（必要な場合はフルパスで）、[Enter] を押します。次に例を示します。

```
sh ./setup.sh /ul/scripts/install.txt
```



注意: インストーラに対してコマンドライン・パラメータを指定し、インストールのデフォルト設定を無効にすることができます。たとえば、デフォルトで実施される初期システム・チェックをオフにできます。詳細は、A-13 ページの「[スクリプト・ファイルのエントリの変更](#)」を参照してください。

5. インストーラがスクリプト・ファイルを分析します。致命的なエラーがない場合は、インストール・スクリプト・ファイルに含まれるパラメータに基づいて、Inbound Refinery のインストールを開始します。処理が行われている間、メッセージ行に、完了した処理の割合と、現在実行されているタスクの簡単な説明が表示されます。

インストール前の初期チェックの後で発生したエラーは、log.txt という名前のログ・ファイルに記録されます。このファイルは、<refinery_install_dir>/install ディレクトリにあります。これはプレーン・テキスト・ファイルであるため、メモ帳、ワードパッド、vi などのテキスト・エディタを使用して開き、編集できます。



注意: 使用できるスクリプト・ファイル・エントリなど、インストール・スクリプト・ファイルの詳細は、[付録 A 「インストール・スクリプト・ファイル」](#) を参照してください。

4

インストール後の作業と考慮事項

概要

Inbound Refinery をインストールした後で必要な作業と考慮事項は次のとおりです。

- ❖ [インストール・ログ・ファイル](#) (4-2 ページ)
- ❖ [Content Server への InboundRefinerySupport コンポーネントのインストール](#) (4-2 ページ)
- ❖ [Web サーバーの構成](#) (4-5 ページ)

インストール・ログ・ファイル

Inbound Refinery をインストールした後で、<refinery_install_dir>/install ディレクトリにあるインストールのログ・ファイル (log.txt) を確認することをお勧めします。インストール中に発生したエラーと警告はすべて、このファイルに記録されます。また、インストールの後に手動で実行する必要がある手順も、このファイルに記録されます。たとえば、UNIX にインストールするときは、Obj.conf ファイルの手動コピーが必要な場合があります (Sun ONE を使用する場合は、magnus.conf ファイルのコピーも必要な場合があります)。この場合、ログ・ファイルではコピー元とコピー先のディレクトリが指定されています。



注意: プロキシされたサーバーとしてリファイナリをインストールすると、次のような警告がインストール log.txt ファイルに記録される場合があります。これは、リファイナリからマスター・サーバーに対してはプロバイダを作成できないことを示しています。

```
WARNING: Unable to create provider to master server. java.lang.AssertionError creating  
reserve lock file in c:/ucm/ref1/data/providers/ on loop 0
```

リファイナリではマスター・サーバーに対するプロバイダは必要ないので、この警告は無視してかまいません。

CONTENT SERVER への INBOUNDREFINERYSUPPORT コンポーネントの インストール

Inbound Refinery をインストールした後、リファイナリがプロバイダとなる (つまり、リファイナリが変換ジョブを実行する) 各コンテンツ・サーバーに InboundRefinerySupport コンポーネントをインストールする必要があります。InboundRefinerySupport コンポーネントは、コンテンツ・サーバーで Inbound Refinery の機能を有効にし、次のページを追加します。

- ❖ 「File Formats Wizard」 ページ (「Administration」 → 「Refinery Administration」 → 「File Formats Wizard」)
- ❖ 「Inbound Refinery Conversion Options」 ページ (「Administration」 → 「Refinery Administration」 → 「Conversion Options」)

これらのページを使用して Inbound Refinery の機能を管理する方法の詳細は、『Inbound Refinery 管理ガイド』を参照してください。

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ コンポーネント・マネージャを使用した [InboundRefinerySupport](#) コンポーネントのインストール (4-3 ページ)
- ❖ コンポーネント・ウィザードを使用した [InboundRefinerySupport](#) コンポーネントのインストール (4-4 ページ)



重要: インストール中に既存のローカル・コンテンツ・サーバーに対するプロバイダとしてリファイナリを構成する場合は、先に [InboundRefinerySupport](#) コンポーネントをコンテンツ・サーバーにインストールしておかないと、リファイナリに正常にログインできません。

コンポーネント・マネージャを使用した [InboundRefinerySupport](#) コンポーネントの インストール

コンポーネント・マネージャを使用して [InboundRefinerySupport](#) コンポーネントをインストールするには、次の手順を実行します。

1. 新しいブラウザ・ウィンドウを開き、システム管理者としてコンテンツ・サーバーにログインします。
2. 管理サーバーを起動します。
3. 「Content Admin Server」ページで、[InboundRefinerySupport](#) コンポーネントをインストールするコンテンツ・サーバー・インスタンスのボタンをクリックします。コンテンツ・サーバー・インスタンスのステータス・ページが表示されます。
4. サーバー・インスタンスのオプション・リストで、「**Component Manager**」リンクをクリックします。「Component Manager」ページが表示されます。
5. 「**Install New Component**」フィールドの隣の「**Browse**」ボタンをクリックします。
6. [Inbound Refinery](#) の配布メディアの [InboundRefinerySupport](#) コンポーネントに移動します。
7. コンポーネントの zip ファイルを選択し、「**Open**」をクリックします。
8. 「**Install**」をクリックします。概要ページが表示され、インストールされるアイテムのリストが示されます。
9. 「**Continue**」をクリックします。必要なすべてのファイルがインストールされます。これには数分かかる場合があります。
10. すべてのファイルがコピーされると、コンポーネントのアップロードとインストールが正常に完了したことを伝えるメッセージが表示されます。

11. リンクをクリックし、コンポーネントを有効にしてサーバーを再起動します。コンテンツ・サーバーのステータス・ページが表示されます。
12. 再起動ボタンをクリックして、コンテンツ・サーバーのインスタンスを再起動します。

コンポーネント・ウィザードを使用した InboundRefinerySupport コンポーネントの インストール

コンポーネント・ウィザードを使用して InboundRefinerySupport コンポーネントをインストールするには、次の手順を実行します。

1. コンポーネント・ウィザードを起動します。
 - ❖ Windows では、「スタート」→「プログラム」→「Stellent Content Server」→「<instance>」→「Utilities」→「Component Wizard」を選択します。
 - ❖ UNIX では、<install_dir> /bin ディレクトリに移動します。コマンド・プロンプトで、ComponentWizard と入力します。

コンポーネント・ウィザードのメイン画面と、「Component List」画面が表示されます。
2. 「Install」をクリックします。「Install」ダイアログが表示されます。
3. 「Select」をクリックし、Inbound Refinery の配布メディアの InboundRefinerySupport コンポーネントに移動します。
4. コンポーネントの zip ファイルをダブルクリックするか、「Open」をクリックします。「Install」リストに、インストールされるファイルが表示されます。
5. 「OK」をクリックします。必要なすべてのファイルがインストールされます。これには数分かかる場合があります。
6. すべてのファイルがコピーされた後、コンポーネントの有効化を確認するよう求められます。「Yes」をクリックします。
7. コンポーネント・ウィザードを閉じます。
8. コンテンツ・サーバーを再起動します。

WEB サーバーの構成

リファイナリのインストール中に行ったインストールに関する選択および Web サーバーによっては、リファイナリで使用するよう Web サーバーを設定および構成するために、いくつかの作業を行うことが必要になる場合があります。

- ❖ [Web サーバーの手動構成](#) (4-5 ページ)
- ❖ [Sun Web Server の構成ファイル](#) (4-5 ページ)
- ❖ [IIS 6.0 に対する MIME タイプの登録](#) (4-6 ページ)

Web サーバーの手動構成

リファイナリのインストール中に Web サーバーの手動構成を選択した場合は、リファイナリで使用するために Web サーバーを設定および構成する作業をいくつか行う必要があります。詳細は、[付録 B 「Web サーバーの手動セットアップ」](#) を参照してください。

Sun Web Server の構成ファイル

リファイナリのインストール中に、Sun Web Server の自動構成を選択した場合は、構成ファイルが変更されています。変更を有効にするには、変更を適用する必要があります。

Sun Web Server に変更を適用するには、次の手順を実行します。

1. Administer Web Server ユーティリティを起動します。
2. ユーザー名とパスワードを入力します。
3. リファイナリを選択し、「**Manage**」をクリックします。
4. 構成ファイルが変更されたことを示すメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックします。
5. 画面の右上隅にある「**Apply**」をクリックします。
6. 「Apply Changes」ページが表示されます。「**Load Configuration Files**」をクリックします。
7. 最近の変更がロードされたことを確認するメッセージが表示されます。
8. 「**OK**」をクリックします。
9. ブラウザを閉じます。

IIS 6.0 に対する MIME タイプの登録

ファイルの拡張子が Web サイトの MIME タイプとして登録されていない場合、セキュリティ上の理由から、IIS 6.0 ではファイルが処理されません。MIME (Multipurpose Internet Mail Extensions) は、配信されるデータの種類を伝えるために使用される標準です。ファイル拡張子が登録されていない場合、IIS 6.0 は 404 (File not found) のステータス・コードをクライアント・ブラウザに返します。これが発生すると、sc-status 404 および scsubstatus 3 が IIS ログに記録されます。

この状況の発生を防ぐには、MIME タイプを IIS に登録し、IIS によって関連するファイルがエンド・ユーザーに提供されるようにする必要があります。そのためには、次の手順を実行します。

1. 「管理ツール」から「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を起動します。
2. サーバー・レベル・オブジェクトの「プロパティ」ダイアログを表示します。このオブジェクトの場所とテキストは、起動したツールにより異なる場合があります。どのビューでも、「Web サイト」フォルダの上のレベルです。
3. このダイアログ・ボックスの下部で、「MIME の種類 ...」ボタンをクリックして「MIME の種類」ダイアログ・ボックスを表示します。ここで、サーバー全体のファイル拡張子の登録の表示、追加、編集および削除を実行できます。

どの MIME タイプを指定するかは、アプリケーションによって異なります。一般に、登録されていないことの多い設定は次のとおりです。

ファイル拡張子	MIME タイプ
. (ファイル拡張子なし)	application/octet-stream
.log	text/plain
.dwg (AutoCAD 図面)	drawing/x-dwg



注意: Windows Server 2003 の更新で、「.」のみのファイル拡張子を追加し、拡張子のないファイルを提供できるようになったことに注意してください。ワイルドカードの拡張子 (*) より拡張子なしの登録を使用する方をお勧めします。ワイルドカードの拡張子を指定するとすべての不明拡張子が提供され、IIS 6.0 でのこの機能の利点が失われます。

4. IIS を再起動します。
5. 構成をテストします。MIME タイプが構成されていると、ファイルを表示またはダウンロードできます。



注意: 特定の Web サイトの構成を変更する場合は、そのサイトの「プロパティ」ダイアログの「HTTP ヘッダー」タブで「MIME の種類」ダイアログを使用します。サイト・レベルでは、サーバー全体の登録は表示されないため、簡単には使用できません。

5

リファイナリの起動と停止

概要

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ [Windows サービスとしてのリファイナリの開始、停止、再起動](#) (5-2 ページ)
- ❖ [Windows アプリケーションとしてのリファイナリの起動と停止](#) (5-4 ページ)
- ❖ [UNIX でのリファイナリの起動と停止](#) (5-5 ページ)
- ❖ [リファイナリへのログオン](#) (5-6 ページ)
- ❖ [管理サーバーを使用したリファイナリの起動と停止](#) (5-7 ページ)

WINDOWS サービスとしてのリファイナリの開始、停止、再起動

Windows にリファイナリをインストールするときは、リファイナリを実行するためのサービスをインストールできます。サービスでは、自動または手動による開始、特定のユーザーとしての実行および別のサービスへの依存を構成できます。Windows サービスとしてリファイナリを開始、停止、再起動するには、次の手順を実行します。



注意: リファイナリを Windows アプリケーションとしてすでに実行している場合は、Windows サービスとして開始することはできません。

1. Windows サービス・コントロール・パネルを開きます。
2. リファイナリ・サービス（例：IDC Refinery Service ref1）を開始するには、次のいずれかを行います。
 - 「サービスの開始」ボタンをクリックします。
 - サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「開始」をクリックします。
3. システムの起動時にリファイナリ・サービスが自動的に開始するよう構成するには、次の手順を実行します。
 - a. サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「プロパティ」をクリックします。
 - b. 「スタートアップの種類」ドロップダウン・メニューから、「自動」を選択します。
 - c. 「OK」をクリックして変更を保存します。
4. リファイナリ・サービスを再起動するには、次のいずれかを行います。
 - 「サービスの再起動」ボタンをクリックします。
 - サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「再起動」をクリックします。
5. リファイナリ・サービスを停止するには、次のいずれかを行います。
 - 「サービスの停止」ボタンをクリックします。
 - サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「停止」をクリックします。
6. リファイナリ、すべての変換アドオンおよびすべての必要なサード・パーティ・アプリケーションのインストールに使用するユーザーと同じユーザーとして、リファイナリ・サービスを実行するように構成することをお勧めします。特定のユーザーとしてリファイナリ・サービスを実行するように構成するには、次の手順を実行します。

- a. サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「プロパティ」をクリックします。
- b. 「ログオン」タブを選択します。
- c. ユーザーのアカウントとパスワードを入力します。ユーザー・アカウントの構文が正しいことを確認します。ドメイン・ユーザーの構文は、`username: [domain]¥[username]` です。ローカル・ユーザーの構文は、`username=¥[username]` です。
- d. 「OK」をクリックして変更を保存します。
- e. リファイナリ・サービスを再起動します。



重要: PDF Converter を使用し、Inbound Refinery をサービスとして実行する場合は、重要な制限がいくつかあります。PDF Converter がサポートするサード・パーティ・アプリケーションの中には、サービスによって起動できないものがあります。また、一部のサード・パーティ・アプリケーションでは、Inbound Refinery をサービスとして実行する場合でも、常にユーザーが Windows にログインする必要があります。Inbound Refinery をアプリケーションまたはサービスのどちらとして実行するかを決定する前に、PDF Converter で使用するサード・パーティ・アプリケーションを明らかにする必要があります。PDF Converter がサポートするサード・パーティ・アプリケーションのリスト、および Inbound Refinery をサービスとして実行するときのサード・パーティ・アプリケーション使用の詳細は、『PDF Converter インストールおよび管理ガイド』を参照してください。

WINDOWS アプリケーションとしてのリファイナリの起動と停止

アプリケーションとしてリファイナリを起動するには、次のいずれかを行います。



注意: リファイナリを Windows サービスとしてすでに実行している場合は、Windows アプリケーションとして起動することはできません。

- ❖ Windows の「スタート」メニューからアプリケーションとしてリファイナリを起動するには、「スタート」→「プログラム」→「Stellent Content Server」→「[Refinery_Instance_Name]」→「Inbound Refinery」の順に選択します。コンソール・ウィンドウが開き、ステータス情報が表示されます。
- ❖ Windows のコマンドラインからアプリケーションとしてリファイナリを起動するには、次の手順を実行します。
 - a. コマンドライン・ウィンドウ（コンソール）を開き、次のディレクトリに移動します。
`<refinery_install_dir>%bin%`
 - b. リファイナリを起動するには、次の実行可能ファイルを開始します。
`IdcRefinery.exe`
リファイナリが起動します。コンソール・ウィンドウは開いたままで、ステータス情報が表示されます。



技術ヒント: コンソールにデバッグ情報を表示する場合は、実行フラグ（パラメータ）`IdcRefinery.exe -console -debug` を指定してリファイナリを起動します。

アプリケーションとして実行しているリファイナリを停止するには、リファイナリのコンソール・ウィンドウを閉じます。

UNIX でのリファイナリの起動と停止

次の UNIX コマンドを使用すると、システムにログインせずに、リファイナリを起動、停止および再起動できます。

❖ **idcserver_query**

このコマンドは、リファイナリのステータスをチェックして、実行中かどうかを判別します。このコマンドは、リファイナリのインストール・ディレクトリの `/etc` サブディレクトリにあります。

❖ **idcserver_start**

このコマンドは、リファイナリをバックグラウンドで起動します。このコマンドは、リファイナリのインストール・ディレクトリの `/etc` サブディレクトリにあります。

❖ **idcserver_ctrl**

これは `rc` ファイルとして使用するのに適したスクリプト・ファイルであり、システムを起動するたびにリファイナリを自動的に起動するための起動指示が含まれています。このコマンドは、リファイナリのインストール・ディレクトリの `/etc` サブディレクトリにあります。

❖ **idcserver_stop**

このコマンドは、`idcserver_start` で起動したリファイナリを停止します。このコマンドは、リファイナリのインストール・ディレクトリの `/etc` サブディレクトリにあります。

❖ **idcserver_restart**

このコマンドは、`idcserver_start` で起動したリファイナリを停止して再起動します。このコマンドは、リファイナリのインストール・ディレクトリの `/etc` サブディレクトリにあります。

リファイナリへのログオン

実行中のリファイナリにログオンするには、次の手順を実行します。



重要: インストール中に既存のローカル・コンテンツ・サーバーに対するプロバイダとしてリファイナリを構成する場合は、先に **InboundRefinerySupport** コンポーネントをコンテンツ・サーバーにインストールしておかないと、リファイナリに正常にログインできません。

1. Web ブラウザを起動します。
2. **Inbound Refinery** のホームページ (ポータル・ページ) に移動します。デフォルトのアドレスは `http://[host_name]/[web_root]` (例: `http://server123/ref1/`) です。
3. 「**Login**」をクリックします。
4. ユーザー名とパスワードを入力して、「**OK**」をクリックします。デフォルトは次のとおりです。

自身の認証を管理するリファイナリ:

- ユーザー名: **refadmin**
- パスワード: **idc**

リファイナリの認証を管理するコンテンツ・サーバー:

- ユーザー名: **sysadmin**
- パスワード: **idc**



注意: **Inbound Refinery** ユーザーの管理の詳細は、『**Inbound Refinery 管理ガイド**』を参照してください。

管理サーバーを使用したリファイナリの起動と停止

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ [Windows](#) でのサービスとしての管理サーバーの開始、停止、再起動 (5-7 ページ)
- ❖ [Windows](#) でのアプリケーションとしての管理サーバーの起動、停止、再起動 (5-8 ページ)
- ❖ [UNIX](#) での管理サーバーの起動と停止 (5-9 ページ)
- ❖ [管理サーバーを使用したリファイナリの起動、停止、再起動](#) (5-10 ページ)
- ❖ [管理サーバーへのリファイナリの追加](#) (5-10 ページ)

Windows でのサービスとしての管理サーバーの開始、停止、再起動

管理サーバーを使用すると、Web ベースの Content Server または Inbound Refinery インタフェースを使用して、リファイナリの HTML ベースのリモート管理を行うことができます。Windows にリファイナリをインストールするときに、リファイナリを管理するための管理サーバーをインストールできます。また、このリファイナリ管理サーバーを実行するためのサービスをインストールでき、サービスの自動開始または手動開始を構成できます。

インストールの際に、同じコンピュータ上の既存の管理サーバーにリファイナリを追加することもできます。また、インストールの後で既存の管理サーバーにリファイナリを追加することもできます。詳細は、5-10 ページの「[管理サーバーへのリファイナリの追加](#)」を参照してください。

Windows サービスを使用して管理サーバーを開始、停止、再起動するには、次の手順を実行します。

1. Windows サービス・コントロール・パネルを開きます。
2. 管理サーバー・サービス (例: IDC Content Admin Service ref1_admin) を開始するには、次のいずれかを行います。
 - 「サービスの開始」ボタンをクリックします。
 - サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「開始」をクリックします。
3. システムの起動時に管理サーバー・サービスが自動的に開始するよう構成するには、次の手順を実行します。
 - a. サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「プロパティ」をクリックします。

- b. 「スタートアップの種類」 ドロップダウン・メニューから、「自動」を選択します。
 - c. 「OK」をクリックして変更を保存します。
4. 管理サーバー・サービスを再起動するには、次のいずれかを行います。
 - 「サービスの再起動」 ボタンをクリックします。
 - サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「再起動」をクリックします。
5. 管理サーバー・サービスを停止するには、次のいずれかを行います。
 - 「サービスの停止」 ボタンをクリックします。
 - サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「停止」をクリックします。
6. リファイナリ、すべての変換アドオンおよびすべての必要なサード・パーティ・アプリケーションのインストールに使用するユーザーと同じユーザーとして、リファイナリ管理サーバー・サービスを実行するように構成することをお勧めします。特定のユーザーとしてリファイナリ・サービスを実行するように構成するには、次の手順を実行します。
 - a. サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「プロパティ」をクリックします。
 - b. 「ログオン」 タブを選択します。
 - c. ユーザーのアカウントとパスワードを入力します。ユーザー・アカウントの構文が正しいことを確認します。ドメイン・ユーザーの構文は、`username: [domain]¥[username]` です。ローカル・ユーザーの構文は、`username=.[username]` です。
 - d. 「OK」をクリックして変更を保存します。
 - e. サービスを再起動します。

Windows でのアプリケーションとしての管理サーバーの起動、停止、再起動

Windows のコマンドラインからアプリケーションとして管理サーバーを起動するには、次の手順を実行します。

1. コマンドライン・ウィンドウ（コンソール）を開き、次のディレクトリに移動します。

```
<content_server_or_refinery_install_dir>¥admin¥bin¥
```
2. 管理サーバーを起動するには、次の実行可能ファイルを開始します。

```
IdcAdmin.exe
```

管理サーバーが起動します。コンソール・ウィンドウは開いたままで、ステータス情報が表示されます。



技術ヒント: コンソールにデバッグ情報を表示する場合は、実行フラグ (パラメータ) `IdcAdmin.exe -console -debug` を指定して管理サーバーを起動します。

アプリケーションとして実行している管理サーバーを停止するには、管理サーバーのコンソール・ウィンドウを閉じます。

UNIX での管理サーバーの起動と停止

次の UNIX コマンドを使用すると、システムにログインせずに、管理サーバーを起動、停止および再起動できます。

❖ `idcadmin_query`

このコマンドは、管理サーバーのステータスをチェックして、実行中かどうかを判別します。このコマンドは、コンテンツ・サーバーまたはリファイナリのインストール・ディレクトリの `admin/etc` サブディレクトリにあります。

❖ `idcadmin_start`

このコマンドは、管理サーバーを起動した後、そのシステムにあるリファイナリの HTML ベースのリモート管理を可能にします。このコマンドは、コンテンツ・サーバーまたはリファイナリのインストール・ディレクトリの `admin/etc` サブディレクトリにあります。

❖ `idcadmin_ctrl`

これは `rc` ファイルとして使用するのに適したスクリプト・ファイルであり、システムを起動するたびに管理サーバーを自動的に起動するための起動指示が含まれています。このコマンドは、コンテンツ・サーバーまたはリファイナリのインストール・ディレクトリの `admin/etc` サブディレクトリにあります。

❖ `idcadmin_stop`

このコマンドは、`idcadmin_start` で起動した管理サーバーを停止します。このコマンドは、コンテンツ・サーバーまたはリファイナリのインストール・ディレクトリの `admin/etc` サブディレクトリにあります。

❖ `idcadmin_restart`

このコマンドは、`idcadmin_start` で起動した管理サーバーを停止して再起動します。このコマンドは、コンテンツ・サーバーまたはリファイナリのインストール・ディレクトリの `admin/etc` サブディレクトリにあります。

管理サーバーを使用したリファイナリの起動、停止、再起動

管理サーバーを使用し、Web ベースのインタフェースを通して、リファイナリをリモートで起動、停止、再起動するには、次の手順を実行します。

1. 管理サーバーが動作していることを確認します。詳細は、次を参照してください。
 - [Windows でのサービスとしての管理サーバーの開始、停止、再起動](#) (5-7 ページ)
 - [Windows でのアプリケーションとしての管理サーバーの起動、停止、再起動](#) (5-8 ページ)
 - [UNIX での管理サーバーの起動と停止](#) (5-9 ページ)
2. 管理サーバーがインストールされているコンテンツ・サーバーまたはリファイナリに、十分な管理者権限を持ってログオンしていることを確認します。詳細は、5-6 ページの「[リファイナリへのログオン](#)」を参照してください。
3. 「Administration」ページに移動し、「Admin Server」をクリックします。
4. 使用可能なすべてのリファイナリが一覧表示されます。
 - リファイナリを起動するには、起動ボタンをクリックします。
 - リファイナリを再起動するには、再起動ボタンをクリックします。
 - リファイナリを停止するには、停止ボタンをクリックします。



注意: 管理サーバーを通してリファイナリにアクセスするには、sysmanager ロールが必要です。

管理サーバーへのリファイナリの追加

インストール中に、リファイナリの管理サーバーをインストールすることも、同じコンピュータ上の既存の管理サーバーにリファイナリを追加することもできます。インストールの後で既存の管理サーバーにリファイナリを追加するには、次の手順を実行します。

1. 追加するリファイナリのインストール・ディレクトリにローカル・ファイル・システムがアクセスできることを確認します。
2. 既存の管理サーバーを起動します。
3. 「Add Existing Server」をクリックします。
4. 「Other Server (Refinery or Other Agent)」を選択します。
5. 「Submit」をクリックします。
6. 追加するリファイナリのインストール・ディレクトリのフルパスを入力します。

7. ファイルのエンコーディングが正しいことを確認します。
8. 「**Next**」をクリックします。
9. 必要に応じてリファイナリの構成を変更します。通常は、「**Description**」および（場合によっては）「**Allowed Actions**」を除き、設定を変更する必要はありません。
10. 「**Finish**」をクリックします。リファイナリのボタンが、管理サーバーのホーム・ページに表示されます。

リファイナリの起動と停止

6

既存の INBOUND REFINERY の更新

概要

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ [サポートされる更新バージョン](#) (6-1 ページ)
- ❖ [始める前に](#) (6-2 ページ)
- ❖ [コマンドライン・インストーラを使用した 10g リリース 3 のリファインリの更新](#) (6-3 ページ)

サポートされる更新バージョン

既存の Inbound Refinery 10g リリース 3 を、新しいバージョンの 10g リリース 3 ビルドに更新できます。10g リリース 3 より前のバージョンの Inbound Refinery から 10g リリース 3 への更新はサポートされていません。

始める前に

既存の Inbound Refinery 10g リリース 3 インストールから新しいバージョンの 10g リリース 3 ビルドへの更新を行う前に、次の重要な考慮事項と推奨事項を確認してください。

- ❖ 既存の 10g リリース 3 の Inbound Refinery インストールから新しいバージョンの 10g リリース 3 ビルドへの更新のみがサポートされています。10g リリース 3 より前のバージョンの Content Refinery または Inbound Refinery を使用している場合は、Inbound Refinery 10g リリース 3 の新規インストールを行う必要があります。支援が必要な場合は、サポートに問い合わせてください。
- ❖ 使用しているハードウェアとソフトウェアが、[第 2 章「インストール前の作業と考慮事項」](#) で指定されているすべての要件を満たすことを確認します。
- ❖ リファイナリがコンポーネントを実行している場合は、そのコンポーネントが新しいリファイナリのビルドと互換性があること、または新しい更新されたコンポーネントのバージョンがあることを確認します。
- ❖ リファイナリがインストールされているディレクトリ構造全体の最新のバックアップがあることを確認します。
- ❖ リファイナリがすべてのコンテンツ・アイテムの処理を終了するまで待ちます。その後、リファイナリを停止するか、新しい変換ジョブを受け付けないようにリファイナリ・プロバイダを構成します。
- ❖ リファイナリを更新する前に、すべての Content Server と Inbound Refinery アプリケーション（アプレット）を終了します。
- ❖ 更新を開始する前に、リファイナリに接続しているブラウザがないことを確認します。
- ❖ リファイナリをアプリケーションとして実行している場合は、更新する前に停止します。
- ❖ リファイナリをサービスとして実行している場合は、停止する必要はありません。インストーラは、更新処理中にリファイナリ・サービスが実行中であることを検出すると、自動的に停止し、更新が完了した後で再開します。

コマンドライン・インストーラを使用した 10g リリース 3 のリファイナリの更新

コマンドライン・インタフェースを使用して既存の 10g リリース 3 のリファイナリを新しい 10g リリース 3 ビルドに更新するには、次の手順を実行します。

1. Inbound Refinery コンピュータにログインします。Inbound Refinery のインストールと実行に使用するユーザー・アカウントに留意してください。詳細は、2-14 ページの「[Inbound Refinery 環境の準備](#)」を参照してください。
2. Windows で更新する場合は、他のすべての Windows プログラムを閉じます。
3. コマンド・プロンプトまたはシェル・ウィンドウを開き、Inbound Refinery 配布メディアの Inbound Refinery インストール・ディレクトリに移動します。
4. インストーラを起動します。
 - ❖ **Windows:** Installer と入力して、[Enter] を押します。
 - ❖ **UNIX:** sh ./setup.sh と入力して、[Enter] を押します。



注意: インストーラに対してコマンドライン・パラメータを指定し、インストールのデフォルト設定を無効にすることができます。たとえば、デフォルトで実施される初期システム・チェックをオフにできます。詳細は、A-13 ページの「[スクリプト・ファイルのエントリの変更](#)」を参照してください。

5. 更新手順の言語の選択を求められます。リストから言語を選択し、[Enter] を押します。
6. インストール・オプションのメニューが表示されます。既存のリファイナリを更新するには、2 と入力して [Enter] を押します。
7. リファイナリのインストール・ディレクトリのフルパスの入力を求められます（例：c:/ucm/ref1/）。ディレクトリ・パスを入力し、[Enter] を押します。
8. Windows での更新の場合は、Administration Server サービスを特定のユーザーとして実行する必要があるかどうかの指定を求められます。この設定を変更する場合は、「yes」を選択します。それ以外の場合は、「no」を選択します。

「yes」を選択すると、ユーザー名とパスワードの入力を求められます。Inbound Refinery とその変換アドオンおよびすべての必要なサード・パーティ・アプリケーションのインストールに使用するユーザーと同じユーザーとして、サービスを実行することをお勧めします。

ユーザー名の構文が正しいことを確認します。

ローカル・ユーザー名の構文：.¥[username]

ドメイン・ユーザー名の構文：[domain]¥[username]



重要: 特定のユーザーとして実行するようサービスを構成する場合、このユーザーは Windows サービスとしてログオンする権限を付与されている必要があります。

9. Windows での更新の場合は、リファイナリ・サービスを特定のユーザーとして実行する必要があるかどうかの指定を求められます。この設定を変更する場合は、「yes」を選択します。それ以外の場合は、「no」を選択します。

「yes」を選択すると、ユーザー名とパスワードの入力を求められます。Inbound Refinery とその変換アドオンおよびすべての必要なサード・パーティ・アプリケーションのインストールに使用するユーザーと同じユーザーとして、サービスを実行することをお勧めします。

ユーザー名の構文が正しいことを確認します。

ローカル・ユーザー名の構文: .¥[username]

ドメイン・ユーザー名の構文: [domain]¥[username]



重要: 特定のユーザーとして実行するようサービスを構成する場合（推奨）、このユーザーは Windows サービスとしてログオンする権限を付与されている必要があります。

10. インストーラは、更新前のいくつかのチェックを実行します。エラーまたは警告がある場合は報告されます。更新の設定を確認し、更新を続行するか、中止するか、構成を再確認するかを指定します。準備ができたなら、メニュー・オプションを選択して [Enter] を押します。
11. 更新のログ・ファイルを確認します。詳細は、4-2 ページの「[インストール・ログ・ファイル](#)」を参照してください。
12. コンポーネント・マネージャまたはコンポーネント・ウィザードを使用して、コンテンツ・サーバーの InboundRefinerySupport コンポーネントを更新します。
 - a. コンポーネント・マネージャまたはコンポーネント・ウィザードを使用して、InboundRefinerySupport コンポーネントを無効にし、アンインストールします。
 - b. コンテンツ・サーバーを再起動します。
 - c. 新しい InboundRefinerySupport コンポーネントをインストールして有効にします。詳細は、4-2 ページの「[Content Server への InboundRefinerySupport コンポーネントのインストール](#)」を参照してください。
 - d. コンテンツ・サーバーを再起動します。



インストール・スクリプト・ ファイル

概要

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ [スクリプト・ファイルについて](#) (A-2 ページ)
- ❖ [スクリプト・ファイルの構造](#) (A-2 ページ)
- ❖ [スクリプト・ファイルのエントリ](#) (A-4 ページ)
- ❖ [自動インストールへのスクリプト・ファイルの使用](#) (A-12 ページ)
- ❖ [スクリプト・ファイルのエントリの変更](#) (A-13 ページ)
- ❖ [Windows のコマンドラインでの特別なインストール作業の実行](#) (A-14 ページ)

スクリプト・ファイルについて

Inbound Refinery 10g リリース 3 は、スクリプト・ファイルを使用してインストールされます。スクリプト・ファイルには、インストーラが使用する一連のインストール・パラメータが含まれています。たとえば、パラメータでは、ソフトウェアをインストールする場所や、使用する JVM などが定義されています。

スクリプト・ファイルは、一連のインストール・プロンプトでユーザーが行った応答に基づいて、ソフトウェアのインストーラによって自動的に作成されます。その後、生成されたスクリプト・ファイルを使用して、ソフトウェアがインストールされます（バックグラウンドで実行されます）。

Inbound Refinery 10g リリース 3 は、自動インストールもサポートします。自動インストールは、基本的に、特定のスクリプト・ファイルをパラメータとして使用するコマンドライン・インストールです。この方法を使用すると、まったく同じインストール設定を使用して、複数のコンピュータに Inbound Refinery をインストールおよびセットアップできます。インストール・プロセスの開始以外に、ユーザーが操作する必要はありません。詳細は、A-12 ページの「[自動インストールへのスクリプト・ファイルの使用](#)」を参照してください。

スクリプト・ファイルの構造

インストール・スクリプト・ファイルはプレーン・テキスト・ファイルであり、メモ帳、ワードパッド、vi などのテキスト・エディタを使用して作成できます。新規に作成することもできますが、既存のスクリプト・ファイルをニーズに合わせて変更することをお勧めします。

このファイルを作成する最も簡単な方法は、Inbound Refinery の新規インストールを、最終確認手順まですべて通して行うことです。最終確認の段階で、インストールを中止します。この間にインストーラによって生成されたインストール・スクリプト・ファイルを、使用または編集できます。スクリプト・ファイルは、`<refinery_install_dir>/install` ディレクトリにあります。ファイル名は、`[date]-new.txt` または `[date]-update.txt` です。`[date]` は当日の日付で、`2003-08-21-new.txt` のようになります。コマンドラインで生成されるスクリプトの場合、日付の形式は常に YYYY-MM-DD です。

パラメータ = 値

各スクリプト・ファイルには、複数のインストール・パラメータが次の書式で記述されています。

```
Parameter_Name=Parameter_Value
```

パラメータごとに 1 行が使用されます。

コメント行

インストール・スクリプト・ファイルの#で始まる行はすべてコメント行と見なされ、無視されます。次に例を示します。

```
#This is a comment line.
```

スクリプト・ファイルの例

Windows での新規インストール用のスクリプト・ファイルの例を次に示します。

```
<?cfg jcharset="UTF8"?>
IntradocDir=c:/ucm/ref1
InstallJvm=win32-sun-1.5.0_07
VaultDir=c:/ucm/ref1/vault/
WeblayoutDir=c:/ucm/ref1/weblayout/
ConfigureProxiedServer=local_server
MasterServerDir=c:/ucm/cs1/
ConfigureAdminServer=configure_existing
AdminServerDir=c:/ucm/cs1/admin/
WebBrowserPath=c:/program files/internet explorer/iexplore.exe
SystemLocale=English-US
IntradocServerPort=5555
SocketHostAddressSecurityFilter=127.0.0.1|10.143.*.*
HttpRelativeWebRoot=/ref1/
HttpServerAddress=IDVM190
IDC_Name=ref1
InstanceMenuLabel=ref1
InstanceDescription=Inbound Refinery ref1
WebServer=iis
InstallType=new
InstallConfiguration=RefineryInstall
InstallAdminServerService=false
InstallServerService=auto
ConfigureServerServiceRunAs=true
InstallServerServiceUser=.*Administrator
InstallServerServicePassword=idc
ConfigureServerServiceDependency=false
Platform=win32
UserLocale=English-US
RunChecks=true
RunInstall=true
SourceDirectory=G:/InboundRefinery/win32/
SHARED_CONFIG_DIR=$BIN_DIR/..
InstallerJvmPath=G:/InboundRefinery/win32/../../../../3rdParty/win32/jdk1.5.0_07/bin/java.exe
TargetDir=c:/ucm/ref1/
IsRefineryInstall=1
OS_DIR=$SHARED_CONFIG_DIR
MediaDirectory=G:/InboundRefinery/win32/../../../../
MEDIA_DIR=$BIN_DIR/../../../../
JAVA_CLASSPATH_refineryinstall=$ALLPLATFORM_PACKAGES_DIR/idcrefinery.jar
RefineryInstallTypes=new
InstallDefinitionFile_refinery=ref_install_info.htm
```

スクリプト・ファイルのエントリ

この項では、スクリプト・ファイル内に指定できるすべてのインストール・パラメータを（アルファベット順で）リストし、その説明、有効な値、およびその他の考慮事項を示します。

この項の内容は、次のとおりです。

- ❖ [一般的な考慮事項](#) (A-4 ページ)
- ❖ [スクリプト・ファイルのエントリ](#) (A-5 ページ)

一般的な考慮事項

次の一般的な考慮事項に注意してください。

- ❖ **大 / 小文字の区別**: パラメータ値（特にディレクトリ・パスとファイル名）では、大 / 小文字の区別に注意することをお勧めします。スクリプト・ファイルを UNIX 環境で使用する場合は、このことが特に重要です。UNIX では、大 / 小文字が区別されます（つまり、/u1/IBR/Vault と /u1/ibr/vault は同じではありません）。Microsoft Windows では、パスとファイル名については大 / 小文字は区別されません。つまり、Windows ではこのことは問題になりません。
true/false タイプのパラメータについては、大 / 小文字は重要ではありません。この種のパラメータの値は、true、True、TRUE のいずれでもかまいません。
- ❖ **スラッシュ**: Windows 環境であっても（特に指示がないかぎり）、ディレクトリ・パスにはスラッシュ (/) を使用してください（例: c:/ibr/vault）。
- ❖ **不正なパラメータまたはパラメータの欠落**: インストーラが不正なパラメータ値を検出した場合は、通常、（可能な場合は）そのパラメータのデフォルト値でインストールが実行されます。たとえば、CreateDatabase パラメータの値に（false または no ではなく）nein が設定されている場合、インストールは実行されますが、（デフォルトとして）データベース表は自動的に作成されます。ただし、欠落したパラメータまたは不正なパラメータがソフトウェアの正常なインストールにとって不可欠である場合は、インストールは中止されます。たとえば、TargetDir パラメータ（インストール先ディレクトリ）のパスに無効な文字が含まれている場合、ファイルのコピー先がないため、インストーラはインストールを中止します。
- ❖ **ログ・ファイル**: インストーラは、インストールごとにログ・ファイルを作成します。ファイルの名前は log.txt で、<refinery_install_dir>/install ディレクトリに作成されます（例: c:\ibr\idcrefinery\install\log.txt または /u1/ibr/idcrefinery/install/log.txt）。
- ❖ **システム変数**: システム変数を使用して、特定のコンテンツ・サーバーの場所を参照できます。

- `$(SourceDirectory)`: この変数は、コンテンツ・サーバー・ソフトウェアのインストール・ファイルが存在するディレクトリを参照します (例:
E:/install/InboundRefinery/win32/ または
/u1/install/InboundRefinery/solaris/)。
この変数を使用して、インストール・ディレクトリの相対参照を行うことができます (例:`$(SourceDirectory)/../../packages/win32` または
`$(SourceDirectory)/../../packages/solaris/`)。

❖ **クラッシュするパラメータ**: インストール・パラメータがクラッシュする場合は、インストール手順は中止されます。

スクリプト・ファイルのエントリ

次のスクリプト・ファイル・エントリが有効です。

Disable8dot3NameCreation=true|yes|false|no

このエントリは、8.3 形式のファイル・ネーミング規則をリファイナリに対して無効にするかどうかを指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、8.3 形式のネーミング規則は無効になりません。

DisableIISFileHandleCaching=true|yes|false|no

このエントリは、IIS のファイル・ハンドル・キャッシングを無効にするかどうかを指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、無効になりません。

FileEncoding=UTF8|[empty]

このエントリは、UTF-8 ファイル・エンコーディングをコンテンツ・サーバーのインスタンスに対して使用するかどうかを指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、UTF-8 ファイル・エンコーディングは使用されず、かわりに、指定されているシステム・ロケールのデフォルトのファイル・エンコーディングが使用されます。

HttpRelativeWebRoot=[web_root]

このエントリは、Web サーバーのルート・ディレクトリを相対 URL として指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、デフォルト (`/idc/`) が使用されます。パラメータ値には US-ASCII 文字のみを使用することをお勧めします。通常は、`http://[HttpServerAddress]/[HttpRelativeWebRoot]` と入力することで、リファイナリのログイン・ページにアクセスします。

例: `HttpRelativeWebRoot=/ibr/`

HttpServerAddress=[address]

このエントリは、Web サーバーの HTTP アドレスを指定します。Web サーバーを参照する HTML ページの生成に使用されます。Web サーバーが 80 以外のポートで動作している場合は、コロンとポート番号を後に付ける必要があります。デフォルトは、現在のコンピュータ・ネットワークの名前（使用できる場合）です。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インストールが中止されます。パラメータ値には US-ASCII 文字のみを使用することをお勧めします。

通常は、`http://[HttpServerAddress]/[HttpRelativeWebRoot]` と入力することで、リファイナリのログイン・ページにアクセスします。

例 : `HttpServerAddress=ibr.company.com:81`

IDC_Name=[name]

このエントリは、リファイナリの一意の名前を指定します。

組織に複数のリファイナリをインストールする場合は、それぞれに異なる名前を使用してください。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インストールが中止されます。

例 : `IDC_Name=Refinery5`

IdcAdminServerPort=[address]

このエントリは、管理サーバーとの通信に使用するポートを定義します。同じコンピュータに複数のリファイナリをインストールする場合は、それぞれに異なる管理サーバー・ポートを使用してください。

リファイナリは管理サーバー・ポートを共有することに注意してください。デフォルトは 4440 です。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、デフォルトのポート番号が使用されます。

例 : `IdcAdminServerPort=4440`

InstallAdminServerService=true|yes|false|no|auto

このエントリは、管理サーバー・サービスのインストール方法を指定します。インストールして自動的に開始すること (auto)、インストールのみ行い自動的に開始しないこと (true または yes) またはインストールしないこと (false または no) のいずれかを選択できます。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、サービスはインストールされて自動的に開始されます。

InstallerJvmPath=[path]

このエントリは、Java 仮想マシン (JVM) のインストールに使用する Java 実行可能ファイルへのフルパスを定義します。

例 : `InstallerJvmPath=D:/VM_Installer/jdk1.5.0_07/bin/java.exe`

例 : `InstallerJvmPath=/ul/JVM_Installer/jdk1.5.0_07/bin/java.exe`

InstallJvm=default|current|custom

Inbound Refinery ソフトウェアとともにインストールする Java 仮想マシン (JVM) を定義します。

- **default:** デフォルトの JVM (2-6 ページを参照) が、Inbound Refinery 用にインストールされます。
- **current:** このオプションは、更新にのみ関係します。パラメータにこの値を設定すると、Inbound Refinery で現在使用されている JVM が引き続き使用されます。
- **custom:** ユーザーが指定する JVM を使用します。Inbound Refinery が使用する必要のある java.exe 実行可能ファイルへのパスは、JvmPath パラメータで指定します。

このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、デフォルトの JVM (2-6 ページを参照) がインストールされます。

InstallServerService=true|yes|false|no|auto

このエントリは、リファイナリ・サービスのインストール方法を指定します。インストールして自動的に開始すること (auto)、インストールのみ行い自動的に開始しないこと (true または yes) またはインストールしないこと (false または no) のいずれかを選択できます。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、サービスはインストールされて自動的に開始されます。

InstallServerServiceDependency=[value]

このエントリは、コンテンツ・サーバー・サービスが開始する前に実行している必要のあるサービスの名前を指定します。

例: InstallServerServiceDependency=MSSQLServer

InstallType=new|update

このエントリは、インストールの種類を指定します。次のオプションがサポートされます。

- **new:** 新しいリファイナリをインストールします。
- **update:** 既存のリファイナリを更新します。

InstanceDescription=[description]

このエントリは、リファイナリの長い説明を指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インスタンスの説明は空白になります (インストールは通常どおり続行されます)。

例: InstanceDescription=Refinery_5

InstanceMenuLabel=[label]

このエントリは、リファイナリの短いラベルを指定します。このラベルは、Web ページでそのインスタンスを識別するために使用されます。ラベルに使用できる文字数は 12 文字以下です。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インスタンスの説明は空白になります（インストールは通常どおり続行されます）。

例 : InstallConfiguration=REF5

IntradocDir=[path]

このエントリは、Inbound Refinery のインストール・ディレクトリを指定します。このパラメータの値が指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インストールは中止されます。

例 : IntradocDir=c:/ibr

例 : IntradocDir=/ul/ibr

IntradocServerPort=[port]

このエントリは、Web サーバーのフィルタまたは他のアプリケーションがリファイナリとの通信に使用するポートを指定します。同じコンピュータに複数のリファイナリをインストールする場合は、それぞれに異なるサーバー・ポートを使用してください。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、デフォルトのポート番号が使用されます。デフォルトは 4444 です。

例 : IntradocServerPort=4445

JvmPath=[path]

InstallJvm パラメータとともに使用されます。Inbound Refinery で使用するカスタム Java 仮想マシン (JVM) の場所を指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、デフォルト JVM が使用されます。

例 : JvmPath=c:/winnt/system32/java.exe

例 : JvmPath=/u1/jvm/java.exe

NtLmSecurityEnabled=ntlm|adsi|no

このエントリは、使用するセキュリティの種類を指定します (Windows のみ)。

- **ntlm:** この値を設定すると、ユーザー / ロール / アカウントの情報は、Microsoft ネットワーク・セキュリティからマップされます。
- **adsi:** この値を設定すると、Active Directory Services Interface (ADSI) が使用されます。

- **no:** この値を設定すると、標準のセキュリティが使用されます。つまり、ユーザー / ロール / アカウントの情報を、Windows NT セキュリティとは別に設定する必要があります。

Oracle Inbound Refinery 10g リリース 3 は、Microsoft Windows Server 2003 では NTLM をサポートしないことに注意してください。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、標準セキュリティが使用されます。

Platform=win32|solaris|linux

Inbound Refinery ソフトウェアをインストールするハードウェア・プラットフォームを指定します。

RunChecks=true|yes|false|no

インストール手順を開始する前にインストーラがいくつかのシステム・チェックを実行するかどうかを指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インストール前のチェックが実行されます。

RunInstall=true|yes|false|no

このパラメータを **false** または **no** に設定すると、インストール手順は実行されません。インストールのチェックのみを実行し、実際のインストールは行わない場合に便利です。

SocketHostAddressSecurityFilter=[IP_addresses]

このエントリは、リファイナリへのアクセスを制限する IP セキュリティ・フィルタを指定します。指定した条件に一致する IP アドレスのホストのみが、リファイナリへのアクセスを許可されます。デフォルト値は 127.0.0.1 (ローカル・ホスト) ですが、有効な IP アドレスをいくつでも追加できます。複数の IP アドレスを指定するには、縦棒 (|) で区切ります。また、ワイルドカード (0 個以上の文字には *、1 文字には ?) を使用できます。

例 : SocketHostAddressSecurityFilter=127.0.0.1|163.192.10.*

SourceDirectory=[path]

Inbound Refinery のインストール・ファイルが存在するディレクトリを指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インストールが中止されます。

例 : SourceDirectory=E:/install/InboundRefinery/win32/

例 : SourceDirectory=/u1/install/InboundRefinery/solaris/

SystemLocale=[locale]

このエントリは、リファイナリのシステム・ロケールを指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インストーラはターゲット・コンピュータのオペレーティング・システムのシステム・ロケールを使用します。ソフトウェア配布メディアの /InboundRefinery/resources/std_locale.htm の LocaleConfig 表 (lcLocaleId 列) には、指定できるシステム・ロケール値の一覧が示されています。次のものが含まれます。

English-US、English-UK、Deutsch、Français、Español、Japanese、Korean、Italiano、Português、Nederlands、Dansk、Svenska、Suomi

例 : SystemLocale=English-US

SystemTimeZone=[time_zone]

このエントリは、リファイナリのデフォルトのタイム・ゾーンを指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インストーラはターゲット・コンピュータのオペレーティング・システムの現在のタイム・ゾーンを使用します。ソフトウェア配布メディアの /InboundRefinery/resources/std_locale.htm の SystemTimeZones 表 (lcTimeZone 列) には、指定できるシステム・ロケール値の一覧が示されています。次のものが含まれます。

America/Los_Angeles、America/Denver、America/Chicago、America/New_York、Europe/London、Europe/Paris、Asia/Singapore、Asia/Seoul、Asia/Tokyo

例 : SystemTimeZone=America/Chicago

TargetDir=[path]

このエントリは、Content Server のインストール・ディレクトリを指定します。このパラメータの値が指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インストールは中止されます。

例 : TargetDir=c:/ibr/

例 : TargetDir=/ul/ibr/

UserLocale=[locale]

このエントリは、コンテンツ・サーバーのデフォルトのユーザー・ロケールを指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、インストーラはターゲット・コンピュータのオペレーティング・システムのユーザー・ロケールを使用します。ソフトウェア配布メディアの %ContentServer%resources%std_locale.htm または

/ContentServer/resources/std_locale.htm の LocaleConfig 表 (lcLocaleId 列) には、指定できるユーザー・ロケール値の一覧が示されています。次のものが含まれます。
 English-US、English-UK、Deutsch、Français、Español、Japanese、Korean、Italiano、Português、Nederlands、Dansk、Svenska、Suomi
 例 : SystemLocale=English-US

VaultDir=[path]

このエントリは、ネイティブ・ファイル・リポジトリのルート・ディレクトリのパスを設定します。このパラメータの値が指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合、インストーラでは [IntradocDir_Variable]/vault と想定されます。

例 : VaultDir=c:/ibr/vault

例 : VaultDir=/ul/ibr/vault

WebBrowserPath=[path]

これは、Inbound Refinery のヘルプ・システムの表示に使用する Web ブラウザの実行可能ファイルのパスです。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、Inbound Refinery のヘルプ・システムはスタンドアロン・アプリケーションでは動作しません。

例 : WebBrowserPath=C:/Program Files/Internet Explorer/ iexplore.exe

例 : WebBrowserPath=/u1/netscape/netscape.exe

WeblayoutDir=[path]

このエントリは、Web 表示可能なファイル・リポジトリのルート・ディレクトリのパスを設定します。このパラメータの値が指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合、インストーラでは [IntradocDir_Variable]/weblayout と想定されます。

例 : VaultDir=c:/ibr/weblayout

例 : VaultDir=/ul/ibr/weblayout

WebServer=apache|nes6|iis>manual

このエントリは、リファインリで使用する Web サーバーを指定します。このパラメータの値が無効な場合、指定されていない場合またはパラメータがスクリプト・ファイルに含まれない場合は、Web サーバーを手動で構成する必要があります。Sun ONE を使用する場合は、nes6 を使用します。

自動インストールへのスクリプト・ファイルの使用

スクリプト・ファイルを使用して自動インストールを実行できます。この方法を使用すると、まったく同じインストール設定を使用して、複数のコンピュータに **Inbound Refinery** ソフトウェアをインストールおよびセットアップできます。インストール・プロセスの開始以外に、ユーザーが操作する必要はありません。



重要: スクリプト・ファイルを実行して **Inbound Refinery** ソフトウェアをインストールする前に、ターゲット・コンピュータがハードウェアおよびソフトウェアの前提条件をすべて満たしていることを確認してください。たとえば、スクリプト・ファイルで指定されている **Web** サーバーがターゲット・コンピュータで稼働していることなどを確認します。これを行わないとインストールは失敗します。

自動インストールを実行するには、スクリプト・ファイルの名前をコマンドライン・パラメータとして指定してインストーラを実行します。次に例を示します。

```
Installer install.txt
```

または

```
sh ./setup.sh install.txt
```

インストーラは、ただちにインストール・スクリプトを分析し、(致命的なエラーが見つからない場合は) インストール・プロセスを開始します。

スクリプト・ファイルのエントリの変更

通常、インストーラは、スクリプト・ファイルに含まれるすべてのインストール・パラメータをそのまま使用します。ただし、実行時にスクリプト・ファイルのパラメータ値を変更できます。これは、次の書式を使用して、コマンドラインにパラメータを追加することで行います。

```
--set-[parameter_name]=[value]
```

次に例を示します。

```
installer --set-RunChecks=false --set-InstallJvm=false script.txt
```

または

```
sh ./setup.sh --set-RunChecks=false --set-InstallJvm=false script.txt
```



注意: パラメータの変更の**後**でスクリプト・ファイル名を指定してください。

前述の例では、インストーラはファイル `script.txt` を使用してインストール・パラメータを取得し、(スクリプト・ファイルでの指定に関係なく) コマンドラインで指定されている変数 `RunChecks` および `InstallJvm` の値を使用します。この方法は、様々な状況で役に立ちます。たとえば、`IDC_Name` (インスタンス名) などのインストール・パラメータをリファイナリごとに一意にする必要がある場合などです。このパラメータをコマンドラインで指定することで、これに対応できます。

WINDOWS のコマンドラインでの特別なインストール作業の実行

インストーラを使用して、Windows のコマンドラインで特別なインストール作業を実行することもできます。これは、特殊なパラメータを指定して `installer.exe` を実行することで行います。次のことが可能です。

- ❖ IIS の構成を作成または削除する。
- ❖ 「スタート」メニューの Inbound Refinery のショートカットを作成または削除する。
- ❖ Windows レジストリの Inbound Refinery のエントリを作成または削除する。
- ❖ ポータル・ページを作成する。

これらの作業を行うには、次の手順を実行します。

1. Inbound Refinery の実行に使用するユーザーとして、Inbound Refinery のコンピュータにログインします。
2. 他のすべての Windows プログラムを終了します。
3. コマンド・プロンプト・ウィンドウを開き、作業を実行するリファイナリの `bin` ディレクトリ (例: `c:\ibrdcm1\bin`) に移動します。



重要: 必ず正しいリファイナリの `bin` ディレクトリに移動してください。そうしないと、誤って別のリファイナリに対してインストール作業を実行し、そのリファイナリが機能しなくなる可能性があります。

4. `Installer [Parameters]` と入力して、`[Enter]` を押します。
5. 指定したインストール作業が実行されます。

サポートされるパラメータ

次のパラメータがサポートされます。

BuildPortal

このパラメータを指定してインストーラを実行すると、インストーラはリファイナリのポータル・ページを再作成します。

ConfigureIIS

このパラメータを指定してインストーラを実行すると、IIS Web サーバーがリファイナリ用に構成されます。UnconfigureIIS も参照してください。

CreateShortcuts

このパラメータを指定してインストーラを実行すると、リファインリのすべてのショートカットが Windows の「スタート」メニューに作成されます。

RemoveShortcuts も参照してください。

RefineryRegisterAll

このパラメータを指定してインストーラを実行すると、インストーラは CreateShortCuts、ConfigureIIS および Register のタスクを単一の操作で実行します。

RefineryUnregisterAll も参照してください。

RemoveShortcuts

このパラメータを指定してインストーラを実行すると、リファインリのすべてのショートカットが Windows の「スタート」メニューから削除されます。

CreateShortcuts も参照してください。

UnconfigureIIS

このパラメータを指定してインストーラを実行すると、リファインリ用の IIS Web サーバーの構成が削除されます。ConfigureIIS も参照してください。

RefineryUnregisterAll

このパラメータを指定してインストーラを実行すると、インストーラは RemoveShortCuts、UnconfigureIIS および Unregister のタスクを単一の操作で実行します。

RefineryRegisterAll も参照してください。

インストール・スクリプト・ファイル

B

WEB サーバーの手動セットアップ

概要

この付録では、Web サーバーを手動でセットアップする場合に実行する必要がある手順について説明します。内容は、次のとおりです。

- ❖ [IIS 5.0 \(Windows 2000 Server\) のセットアップ](#) (B-2 ページ)
- ❖ [IIS 6.0 \(Windows Server 2003\) のセットアップ](#) (B-7 ページ)
- ❖ [Sun Web Server のセットアップ](#) (B-13 ページ)
- ❖ [Apache のセットアップ](#) (B-17 ページ)



注意: 第 2 章「インストール前の作業と考慮事項」のインストール前の作業と考慮事項を読んでください。

IIS 5.0 (WINDOWS 2000 SERVER) のセットアップ

Inbound Refinery ソフトウェアのインストール中に IIS 5.0 の手動セットアップを選択した場合は、次の手順を実行する必要があります。

1. [Web サーバーの指定](#) (B-2 ページ)
2. [パスワード認証の設定](#) (B-2 ページ)
3. [仮想ディレクトリ \(エイリアス\) の設定](#) (B-3 ページ)
4. [ISAPI 認証フィルタの設定](#) (B-5 ページ)
5. [フィルタ名と場所の指定](#) (B-6 ページ)

Web サーバーの指定

IIS 5.0 の手動セットアップを選択すると、Inbound Refinery のインストーラはリファインナリの構成ファイルで Web サーバーを自動的に指定しません。これを手動で行うには、次の手順を実行します。

1. `<refinery_install_dir>%config%config.cfg` ファイルに移動し、テキスト・エディタでこのファイルを開きます。
2. ファイルに次のエントリを追加します。
`WebServer=iis`
通常、このエントリは #Additional Variables の下にあります。
3. 変更した構成ファイルを保存します。

パスワード認証の設定

IIS 5.0 がユーザーの ID を検証する方法を指定するには、次の手順を実行します。

1. 「インターネット・インフォメーション・サービス (IIS) マネージャ」を起動します。
2. リファインナリのツリー・エントリを展開します。
Web サイトと仮想サーバーが表示されます。
3. 「既定の Web サイト」エントリを選択し、右クリックして、「プロパティ」を選択します。
「既定の Web サイトのプロパティ」画面が表示されます。
4. 「ディレクトリ セキュリティ」で、「匿名アクセスおよび認証コントロール」ボックスの「編集」をクリックします。

「認証方法」画面が表示されます。

5. 次のようにして、認証方法を設定します。

- 匿名アクセス：選択
- 基本認証（パスワードはクリアテキストで送信されます）：選択解除

Inbound Refinery のインストールで NT セキュリティの使用を選択した場合は、「統合 Windows 認証」チェック・ボックスも選択します。

6. 「OK」を2回クリックして、メイン画面に戻ります。

7. アプリケーションを終了し、変更を保存します。

仮想ディレクトリ（エイリアス）の設定

リファインリの Web 表示可能ファイル・リポジトリ（Web Layout）とフィルタ・プラグイン・ディレクトリを指し示す、2つの仮想ディレクトリ（エイリアス）を設定する必要があります。そのためには、次の手順を実行します。

1. 「インターネット・インフォメーション・サービス（IIS）マネージャ」を起動します。

2. リファインリのツリー・エントリを展開します。

Web サイトと仮想サーバーが表示されます。

3. 「既定の Web サイト」オプションを選択し、右クリックして、「新規作成」→「仮想ディレクトリ」を選択します。

仮想ディレクトリの作成ウィザードが開始します。



重要: 既存の仮想ディレクトリを使用するのではなく、**新しい**仮想ディレクトリを作成することが非常に重要です。そのようにしないと、セキュリティの問題が発生する可能性があります。

4. ようこそ画面で「次へ」をクリックします。

5. 仮想ディレクトリのエイリアス名（通常は、リファインリの相対 Web ルート、ibr など）を入力し、「次へ」をクリックして続行します。

6. リファインリの Web 表示可能ファイル・ディレクトリの物理パス（例：`c:\ibr\ref1\weblayout`）を指定し、「次へ」をクリックして続行します。

7. 次のようにアクセス許可を設定します。

- 読み取り：選択
- スクリプトの実行：選択解除
- 実行：選択解除
- 書き込み：アプリケーションの要件に従って設定

- 参照: アプリケーションの要件に従って設定
- 終了したら、「次へ」をクリックして続行します。
8. 「完了」をクリックしてウィザードを終了します。
インターネット・インフォメーション・サービスのメイン画面に戻ります。
 9. 手順 5 で作成した仮想ディレクトリを右クリックし、「プロパティ」をクリックします。
 10. 「ドキュメント」タブで、「既定のドキュメントを有効にする」チェック・ボックスを選択し、portal.htm が下のボックスに含まれることを確認します。ない場合は、「追加」をクリックし、portal.htm と入力して、「OK」をクリックします。
 11. 「ディレクトリ セキュリティ」で、「匿名アクセスおよび認証コントロール」ボックスの「編集」をクリックします。
「認証方法」画面が表示されます。
 12. 「匿名アクセス」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
Inbound Refinery のインストールで NT セキュリティの使用を選択した場合は、「統合 Windows 認証」チェック・ボックスも選択します。
 13. 「OK」を 2 回クリックして、インターネット・インフォメーション・サービスのメイン画面に戻ります。
 14. 手順 5 で作成した仮想ディレクトリを右クリックし、「新規作成」→「仮想ディレクトリ」をクリックします。
仮想ディレクトリの作成ウィザードが開始します。
 15. ようこそ画面で「次へ」をクリックします。
 16. 仮想ディレクトリのエイリアス名に idcplg と入力し、「次へ」をクリックして続行します。
 17. フィルタ・プラグイン・ディレクトリの物理パス（例: c:\inetpub\wwwroot\idcplg）を指定し、「次へ」をクリックして続行します。
 18. 次のようにアクセス許可を設定します。
 - 読み取り: 選択解除
 - スクリプトの実行: 選択
 - 実行: 選択
 - 書き込み: 選択解除
 - 参照: 選択解除終了したら、「次へ」をクリックして続行します。
 19. 「完了」をクリックしてウィザードを終了します。
メイン画面に戻ります。

20. 手順 5 で作成した仮想ディレクトリが展開されていることを確認します。新しく作成した `idcplg` 項目を右クリックし、「**プロパティ**」をクリックします。
21. 「ドキュメント」タブで、「既定のドキュメントを有効にする」チェック・ボックスの選択を解除し、「**適用**」をクリックします。
22. 「ディレクトリ セキュリティ」で、「匿名アクセスおよび認証コントロール」ボックスの「**編集**」をクリックします。
「認証方法」画面が表示されます。
23. 「匿名アクセス」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
Inbound Refinery のインストールで NT セキュリティの使用を選択した場合は、「統合 Windows 認証」チェック・ボックスも選択します。
24. 「**OK**」を 2 回クリックして、メイン画面に戻ります。
25. アプリケーションを終了し、変更を保存します。

ISAPI 認証フィルタの設定

IIS 5.0 に ISAPI 認証フィルタを設定するには、次の手順を実行します。

1. 「インターネット・インフォメーション・サービス (IIS) マネージャ」を起動します。
2. リファインリーのツリー・エントリを展開します。
Web サイトと仮想サーバーが表示されます。
3. 「**既定の Web サイト**」オプションを選択し、右クリックして、「**プロパティ**」をクリックします。
「既定の Web サイトのプロパティ」画面が表示されます。
4. 「ISAPI フィルタ」タブを開きます。
5. 「**追加**」をクリックします。
6. 「フィルタのプロパティ」ダイアログが表示されます。
7. 「フィルタ名」フィールドに `Idc Plugin [Instance_Name]` (例: `Idc Plugin idcm1`) と入力します。
8. 「実行ファイル」フィールドでは、実行可能な ISAPI フィルタの名前と場所を指定します (例: `c:\¥ibr¥ref1¥idcplg¥idc_cgi_isapi-idcm1.dll`)。
9. 「**OK**」を 2 回クリックして、メイン画面に戻ります。
10. アプリケーションを終了し、変更を保存します。



重要: Microsoft FrontPage がインストールされている場合、ISAPI 認証フィルタを設定すると、Microsoft FrontPage は無効になります。



注意: Oracle Inbound Refinery ソフトウェアをインストールすると、すべての Web サーバー・プラグインおよび CGI プログラムは、次のディレクトリで使用できます。

- ❖ `<refinery_install_dir>%shared%os%win32%lib`
- ❖ `<refinery_install_dir>%shared%os%win32%bin`

フィルタ名と場所の指定

IIS 5.0 を手動でセットアップした場合は、次の構成ファイルでリファイナリ Web フィルタに対する参照をチェックする必要があります。

- ❖ `<refinery_install_dir>%admin%config%config.cfg`
- ❖ `<refinery_install_dir>%config%config.cfg`
- ❖ `<refinery_install_dir>%admin%data%servers%<instance_name>%server.hda`

HTTP 相対 CGI ルート

HTTP 相対 CGI ルートは、Oracle Inbound Refinery の Web フィルタの場所です。デフォルトの場所は、リファイナリのルート・ディレクトリの `idcplg` サブディレクトリです（例：`c:\%ibr%\ref1\idcplg`）。別のディレクトリを使用する場合は、前述の各構成ファイルで正しい場所（リファイナリのインストール・ディレクトリのサブディレクトリ）を参照する必要があります。

```
HttpRelativeCgiRoot=/<new_directory>/
```

CGI ファイル名

前述の各構成ファイルに、次のエントリを追加します。

```
CgiFileName=idcplg
```

CgiFileName エントリがすでに存在する場合は、前述の行に合わせて変更します。

IIS 6.0 (WINDOWS SERVER 2003) のセットアップ

Inbound Refinery ソフトウェアのインストール中に IIS 6.0 の手動セットアップを選択した場合は、次の手順を実行する必要があります。

1. [Web サーバーの指定](#) (B-2 ページ)
2. [パスワード認証の設定](#) (B-2 ページ)
3. [仮想ディレクトリ \(エイリアス\) の設定](#) (B-3 ページ)
4. [ISAPI 認証フィルタの設定](#) (B-5 ページ)
5. [フィルタ名と場所の指定](#) (B-6 ページ)
6. [Web サービス拡張の設定](#) (B-12 ページ)
7. [MIME タイプの登録](#) (B-12 ページ)

Web サーバーの指定

IIS 6.0 の手動セットアップを選択すると、Inbound Refinery のインストーラはリファインナリの構成ファイルで Web サーバーを自動的に指定しません。これを手動で行うには、次の手順を実行します。

1. `<refinery_install_dir>%config%config.cfg` ファイルに移動し、テキスト・エディタでこのファイルを開きます。
2. ファイルに次のエントリを追加します。
`WebServer=iis`
通常、このエントリは #Additional Variables の下にあります。
3. 変更した構成ファイルを保存します。

パスワード認証の設定

IIS 6.0 がユーザーの ID を検証する方法を指定するには、次の手順を実行します。

1. 「インターネット・インフォメーション・サービス (IIS) マネージャ」を起動します。
2. リファインナリのツリー・エントリを展開します。
3. Web サイトのエントリを展開します。
Web サイトと仮想サーバーが表示されます。

4. 「既定の Web サイト」 エントリを選択し、右クリックして、「プロパティ」を選択します。

「既定の Web サイトのプロパティ」画面が表示されます。

5. 「ディレクトリ セキュリティ」で、「認証とアクセス制御」ボックスの「編集」をクリックします。

「認証方法」画面が表示されます。

6. 次のようにして、認証方法を設定します。

- 匿名アクセスを有効にする : 選択
- 基本認証 (パスワードはクリア テキストで送信) : 選択解除



注意: 匿名アクセスのユーザー名またはパスワードは変更しないでください。

Inbound Refinery のインストールで NT セキュリティの使用を選択した場合は、「統合 Windows 認証」チェック・ボックスも選択します。

7. 「OK」を2回クリックして、メイン画面に戻ります。

8. アプリケーションを終了し、変更を保存します。

仮想ディレクトリ (エイリアス) の設定

リファインナリの Web 表示可能ファイル・リポジトリ (Web Layout) とフィルタ・プラグイン・ディレクトリを指し示す、2つの仮想ディレクトリ (エイリアス) を設定する必要があります。そのためには、次の手順を実行します。

1. 「インターネット・インフォメーション・サービス (IIS) マネージャ」を起動します。

2. リファインナリのツリー・エントリを展開します。

3. Web サイトのエントリを展開します。

Web サイトと仮想サーバーが表示されます。

4. 「既定の Web サイト」 オプションを選択し、右クリックして、「新規作成」→「仮想ディレクトリ」を選択します。

仮想ディレクトリの作成ウィザードが開始します。



重要: 既存の仮想ディレクトリを使用するのではなく、**新しい**仮想ディレクトリを作成することが非常に重要です。そのようにしないと、セキュリティの問題が発生する可能性があります。

5. ようこそ画面で「次へ」をクリックします。

6. 仮想ディレクトリのエイリアス名（通常は、リファイナリの相対 Web ルート、ibr など）を入力し、「次へ」をクリックして続行します。
7. リファイナリの Web 表示可能ファイル・ディレクトリの物理パス（例：`c:\ibr\ref1\weblayout`）を指定し、「次へ」をクリックして続行します。
8. 次のようにアクセス許可を設定します。
 - 読み取り：選択
 - スクリプトの実行：選択解除
 - 実行：選択解除
 - 書き込み：アプリケーションの要件に従って設定
 - 参照：アプリケーションの要件に従って設定終了したら、「次へ」をクリックして続行します。
9. 「完了」をクリックしてウィザードを終了します。
メイン画面に戻ります。
10. 手順 5 で作成した仮想ディレクトリを右クリックし、「プロパティ」をクリックします。
11. 「ドキュメント」タブで、「既定のコンテンツ ページを有効にする」チェック・ボックスを選択し、portal.htm が下のボックスに含まれることを確認します。ない場合は、「追加」をクリックし、portal.htm と入力して、「OK」をクリックします。
12. 「ディレクトリ セキュリティ」で、「認証とアクセス制御」ボックスの「編集」をクリックします。

「認証方法」画面が表示されます。
13. 「匿名アクセスを有効にする」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
Inbound Refinery のインストールで NT セキュリティの使用を選択した場合は、「統合 Windows 認証」チェック・ボックスも選択します。
14. 「OK」を 2 回クリックして、メイン画面に戻ります。
15. 手順 5 で作成した仮想ディレクトリを右クリックし、「新規作成」→「仮想ディレクトリ」をクリックします。

仮想ディレクトリの作成ウィザードが開始します。
16. ようこそ画面で「次へ」をクリックします。
17. 仮想ディレクトリのエイリアス名に idcplg と入力し、「次へ」をクリックして続行します。
18. フィルタ・プラグイン・ディレクトリの物理パス（例：`c:\ibr\ref1\idcplg`）を指定し、「次へ」をクリックして続行します。

19. 次のようにアクセス許可を設定します。

- 読み取り : 選択解除
- スクリプトの実行 : 選択
- 実行 : 選択
- 書き込み : 選択解除
- 参照 : 選択解除

終了したら、「次へ」をクリックして続行します。

20. 「完了」をクリックしてウィザードを終了します。
メイン画面に戻ります。

21. 手順 5 で作成した仮想ディレクトリが展開されていることを確認します。新しく作成した `idcplg` 項目を右クリックし、「プロパティ」をクリックします。

22. 「ドキュメント」タブで、「既定のコンテンツ ページを有効にする」チェック・ボックスの選択が解除されていることを確認し、「適用」をクリックします。

23. 「ディレクトリ セキュリティ」で、「認証とアクセス制御」ボックスの「編集」をクリックします。

「認証方法」画面が表示されます。

24. 「匿名アクセスを有効にする」チェック・ボックスが選択されていることを確認します (ユーザー名またはパスワードは変更しないでください)。

Inbound Refinery のインストールで NT セキュリティの使用を選択した場合は、「統合 Windows 認証」チェック・ボックスも選択します。

25. 「OK」を 2 回クリックして、メイン画面に戻ります。

26. アプリケーションを終了し、変更を保存します。

ISAPI 認証フィルタの設定

IIS 6.0 に ISAPI 認証フィルタを設定するには、次の手順を実行します。

1. 「インターネット・インフォメーション・サービス (IIS) マネージャ」を起動します。
2. リファイナリのツリー・エントリを展開します。
3. Web サイトのエントリを展開します。

Web サイトと仮想サーバーが表示されます。

4. 「既定の Web サイト」 オプションを選択し、右クリックして、「プロパティ」 をクリックします。
「既定の Web サイトのプロパティ」 画面が表示されます。
5. 「ISAPI フィルタ」 タブを開きます。
6. 「追加」 をクリックします。
7. 「フィルタのプロパティの追加と編集」 ダイアログが表示されます。
8. 「フィルタ名」 フィールドに Idc Plugin [Instance_Name] (例: Idc Plugin idcm1) と入力します。
9. 「実行ファイル」 フィールドでは、実行可能な ISAPI フィルタの名前と場所を指定します (例: c:\%br%\ref1%\idcplg\idc_cgi_isapi-idcm1.dll)。
10. 「OK」 を 2 回クリックして、メイン画面に戻ります。
11. アプリケーションを終了し、変更を保存します。



重要: Microsoft FrontPage がインストールされている場合、ISAPI 認証フィルタを設定すると、Microsoft FrontPage は無効になります。



注意: Oracle Inbound Refinery ソフトウェアをインストールすると、すべての Web サーバー・プラグインおよび CGI プログラムは、次のディレクトリで使用できます。

- ❖ <refinery_install_dir>%shared%os%win32%lib
- ❖ <refinery_install_dir>%shared%os%win32%bin

フィルタ名と場所の指定

IIS 6.0 を手動でセットアップした場合は、次の構成ファイルでリファイナリ Web フィルタに対する参照をチェックする必要があります。

- ❖ <refinery_install_dir>%admin%config%config.cfg
- ❖ <refinery_install_dir>%config%config.cfg
- ❖ <refinery_install_dir>%admin%data%servers%\<instance_name>%server.hda

HTTP 相対 CGI ルート

HTTP 相対 CGI ルートは、Oracle Inbound Refinery の Web フィルタの場所です。デフォルトの場所は、リファイナリのルート・ディレクトリの `idcplg` サブディレクトリです（例：`c:\ibrf\idcplg`）。別のディレクトリを使用する場合は、前述の各構成ファイルで正しい場所（リファイナリのインストール・ディレクトリのサブディレクトリ）を参照する必要があります。

```
HttpRelativeCgiRoot=/[New_Directory]/
```

CGI ファイル名

前述の各構成ファイルに、次のエントリを追加します。

```
CgiFileName=idcplg
```

`CgiFileName` エントリがすでに存在する場合は、前述の行に合わせて変更します。

Web サービス拡張の設定

IIS 6.0 を手動でセットアップする場合は、Web サービス拡張を設定する必要があります。

1. 「インターネット・インフォメーション・サービス (IIS) マネージャ」を起動します。
2. リファイナリのツリー・エントリを展開します。
3. 「Web サービス拡張」リンクを選択します。
4. 「新しい Web サービス拡張を追加」をクリックします。
5. 拡張名（例：`Idc Plugin idcm1`）を指定します。
6. 「追加」ボタンをクリックし、必要なファイル（例：
`<refinery_install_dir>\idcplg\idc_isapi_idcm1.dll`）を追加します。
7. 「拡張の状態を許可済みに設定する」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。

MIME タイプの登録

ファイルの拡張子が Web サイトの MIME タイプとして登録されていない場合、セキュリティ上の理由から、IIS 6.0 ではファイルが処理されません。リファイナリで処理されるファイルの種類によっては、MIME タイプを IIS に登録し、Web サーバーが関連するファイルの種類をクライアント・ブラウザに提供できるようにする必要があります。

SUN WEB SERVER のセットアップ

Oracle Inbound Refinery ソフトウェアのインストール中に Sun Web Server の手動セットアップを選択した場合は、次の手順を実行する必要があります。

1. [ドキュメント・ディレクトリの追加](#) (B-13 ページ)
2. [CGI ディレクトリの指定](#) (B-14 ページ)
3. [obj.conf ファイルの変更](#) (B-14 ページ)
4. [magnus.conf ファイルの変更](#) (B-15 ページ)
5. [フィルタ名と場所の指定](#) (B-16 ページ)

ドキュメント・ディレクトリの追加

Web サーバーは、リファイナリの Web 表示可能ファイル・リポジトリ (weblayout ディレクトリ) の場所を認識する必要があります。そのためには、次の手順を実行します。

1. Administer Web Server ユーティリティを起動します。
2. ユーザー名とパスワードを入力します。
3. リファイナリを選択し、「**Manage**」をクリックします。
4. ページの右上隅にある「**Class Manager**」をクリックします。
5. 「**Content Mgmt**」タブを開きます。
6. ページの左側にある「**Additional Document Directories**」リンクをクリックします。
7. URL の接頭辞として `ibr` と入力します。
8. マップするディレクトリとして `<refinery_install_dir>/weblayout` と入力します。次に例を示します。
`c:/ibr/ref1/weblayout`
または
`/u1/ibr/ref1/weblayout`
9. 終了したら「**OK**」をクリックします。

CGI ディレクトリの指定

Web サーバーは、リファイナリの CGI ディレクトリの場所を認識する必要があります。そのためには、次の手順を実行します。

1. Administer Web Server ユーティリティを起動します。
2. ユーザー名とパスワードを入力します。
3. リファイナリを選択し、「**Manage**」をクリックします。
4. ページの右上隅にある「**Class Manager**」をクリックします。
5. 「**Programs**」タブを開きます。
6. ページの左側にある「**CGI Directory**」リンクをクリックします。
7. URL の接頭辞として `idcplg` と入力します。
8. CGI ディレクトリとして `<refinery_install_dir>/idcplg` と入力します。次に例を示します。
`c:/ibr/ref1/idcplg`
または
`/ul/ibr/ref1/idcplg`
9. 終了したら「**OK**」をクリックします。

obj.conf ファイルの変更

Sun Web Server の `obj.conf` ファイルを変更し、2 つの新しいエントリを追加する必要があります。

1. Sun Web Server ソフトウェアのディレクトリに移動し、`https-<host_name>/config` サブディレクトリを開きます。次に例を示します。
`c:\iplanet\servers\https-server7\config`
または
`/ul/iplanet/servers/https-server7/config`
2. テキスト・エディタで `obj.conf` ファイルを開きます。

3. 次の `ppath` オブジェクトを `obj.conf` ファイルに追加します。

```
<Object ppath="[weblayout_dir]/*">
  NameTrans fn="idcNameTrans"
  PathCheck fn="idcPathCheck"
  Service fn="idcService"
</Object>
```

(`[weblayout_dir]` は、Web 表示可能ファイル・リポジトリのフルパスです (例 : `c:/ibr/ref1/weblayout` または `/ul/ibr/ref1/weblayout`)。



注意: 示されているように、複数の行に前述の `Object` エントリを入力します。

4. `<Object name="default">` セクションに、次の行を追加します。

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/[relative_web_root]" dir="[weblayout_dir]"
```

`[relative_web_root]` はリファイナリの相対 Web ルートで、`[weblayout_dir]` は Web 表示可能ファイル・リポジトリのフルパスです。

例:

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/ibr" dir="c:/ibr/ref1/weblayout"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/ibr" dir="/ul/ibr/ref1/weblayout"
```



重要: 前述の `NameTrans` エントリは、示されているように複数行に入力するのではなく、1 行で入力します (改行のかわりにスペースを追加します)。

5. `obj.conf` ファイルに対して行った変更を、Web サーバーの管理ページに適用します。
6. Web サーバーを停止して再起動します。

magnus.conf ファイルの変更

Sun Web Server の `magnus.conf` ファイルを構成し、2 つの新しいエントリを追加する必要があります。

1. Sun Web Server ソフトウェアのディレクトリに移動し、`https-<host_name>/config` サブディレクトリを開きます。次に例を示します。

```
c:\iplanet\servers\https-server7\config
```

または

```
/ul/iplanet/servers/https-server7/config
```

2. テキスト・エディタで `magnus.conf` ファイルを開きます。

- 最後の `Init fn` エントリの後に、次のエントリを追加します。

Windows:

```
Init fn="load-modules"
funcs="idcInit,idcNameTrans,idcPathCheck, idcService"
shlib="[refinery_install_dir]/shared/os/[OS]/lib/
IdcNSAuth.dll"
Init fn="idcInit" idocdb="[refinery_install_dir]/data/users/userdb.txt"
```

UNIX:

```
Init fn="load-modules"
funcs="idcInit,idcNameTrans,idcPathCheck, idcService"
shlib="[refinery_install_dir]/shared/os/[OS]/lib/
IdcNSAuth.so"
Init fn="idcInit" idocdb="[refinery_install_dir]/data/users/userdb.txt"
```

`[refinery_install_dir]` はリファイナリのインストール・ディレクトリのフルパスで、`[OS]` はオペレーティング・システムの名前です。



重要: 前述の各 `Init` エントリは、示されているように複数行に入力するのではなく、1 行で入力します（改行のかわりにスペースを追加します）。

- `magnus.conf` ファイルに対して行った変更を、Web サーバーの管理ページに適用します。
- Web サーバーを停止して再起動します。

フィルタ名と場所の指定

リファイナリ Web フィルタの名前と場所を確認する必要があります。このファイルは、次の構成ファイルで参照されています。

- ❖ `<refinery_install_dir>/admin/config/config.cfg`
- ❖ `<refinery_install_dir>/config/config.cfg`
- ❖ `<refinery_install_dir>/admin/data/servers/<instance_name>/server.hda`

HTTP 相対 CGI ルート

HTTP 相対 CGI ルートは、Oracle Inbound Refinery の Web フィルタの場所です。デフォルトの場所は、リファイナリのルート・ディレクトリの `idcplg` サブディレクトリです（例：`c:\ibr\ref1\idcplg` または `/u1/ibr/ref1/idcplg`）。別のディレクトリを使用する場合は、前述の各構成ファイルで正しい場所（リファイナリのインストール・ディレクトリのサブディレクトリ）を参照する必要があります。

```
HttpRelativeCgiRoot=/[new_directory]/
```

CGI ファイル名

前述の各構成ファイルに、次のエントリを追加する必要があります。

```
CgiFileName=idcplg
```

CgiFileName エントリがすでに存在する場合は、前述の行に合わせて変更します。

APACHE のセットアップ

Inbound Refinery インストーラでは Apache を自動的に構成できないため、手動で構成する必要があります。次の手順で構成されます。

1. [リファイナリ用の Apache の構成](#) (B-17 ページ)
2. [Apache でのデバッグの有効化](#) (B-18 ページ)
3. [ログ・ダンプ・ファイル](#) (B-19 ページ)
4. [正規名の無効化](#) (B-19 ページ)

リファイナリ用の Apache の構成

リファイナリ用に Apache を構成するには、次の手順を実行します。

1. リファイナリごとに、次の構成エントリを httpd.conf ファイルの最後（または、少なくとも clearmodulelist 行の下）に追加します。

- **Solaris および Linux:**

```
LoadModule IdcApacheAuth [Webserver_Filters_Path] /IdcApache2Auth.so
IdcUserDB [Refinery_Instance] "[User_Data_Dir_Path]/userdb.txt"
```

- **Windows:**

```
LoadModule IdcApacheAuth [Webserver_Filters_Path] /IdcApache2Auth.dll
IdcUserDB [Refinery_Instance] "[User_Data_Dir_Path]/userdb.txt"
```

前述の各エントリは 1 行で入力してください。



注意: Web サーバー・フィルタのパスは、通常、Windows では

`[root_dir]\%shared%\os%\win32\lib` で、UNIX では `[root_dir]/shared/os/[OS_name]/lib` です ([OS_name] は、オペレーティング・システムの名前です (例: solaris))。

`[refinery_instance]` は、通常、リファイナリのインスタンス名です (config.cfg の IDC_NAME パラメータ)。ユーザー・データ・ディレクトリへのパスは、通常、`[root_dir]\%data%\users` または `[root_dir]/data/users` です。

次に例を示します。

```
LoadModule IdcApacheAuth C:/ibr/ref1/shared/os/win32/lib/ IdcApache2Auth.dll
IdcUserDB ibr "C:/ibr/ref1/data/users/userdb.txt"
```

または

```
LoadModule IdcApacheAuth /u1/apps/ibr/ref1/shared/os/solaris/lib/ IdcApache2Auth.so
IdcUserDB ibr "/u1/apps/ibr/ref1/data/users/userdb.txt"
```

2. 次のエントリを追加してリファイナリの **weblayout** ディレクトリに別名を設定し、フィルタでセキュリティを管理します。

```
Alias /[Rel_URL_To_Refinery] "[Path_To_Refinery_Webl.]"
<Location /[Rel_URL_To_Refinery]>
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity [Refinery_Instance]
</Location>
```

次に例を示します。

```
Alias /ibr "C:/ibr/ref1/weblayout"
<Location /ibr>
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity ibr
</Location>
```

または

```
Alias /ibr "/u1/apps/ibr/ref1/weblayout"
<Location /ibr>
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity ibr
</Location>
```



注意: リファイナリの Web レイアウトへのパスは、通常は `[root_dir]¥weblayout` または `[root_dir]/weblayout` ですが、別のディスク・ドライブに変更されている場合があります。リファイナリの相対 URL は、最後のスラッシュを除いて指定する必要があります。`[refinery_instance]` は、通常はリファイナリのインスタンス名であり (`config.cfg` の `IDC_NAME` パラメータ)、`IdcUserDB` エントリに使用されている名前と一致する必要があります。

Apache でのデバッグの有効化

Apache でデバッグを有効にするには、次の手順を実行します。

1. 管理者としてリファイナリにログインします。
2. 「Administration」ページを開きます。
3. 「Filter Administration」リンクをクリックします。スクロール・ダウンが必要な場合があります。

「Configure Web Server Filter」ページが表示されます。

4. 「Logging Options」 オプションの下で、CGI_RECEIVE_DUMP オプションと CGI_SEND_DUMP オプションがどちらも選択されていることを確認します。
5. 「Logging Options」 セクションの「Update」 ボタンをクリックします。

ログ・ダンプ・ファイル

ログ・ダンプは、<refinery_install_dir>/data/users/authfilter.log ファイルに記録されます。

UNIX では、vi などのアプリケーションを使用して、手動でこのファイルを作成できます。アクセス許可は、o (other) が +rw (読取りと書込み) 権限を持つように設定します。次に例を示します。

```
vi /u1/work/idctest1/data/users/authfilter.log
```

いくつか情報を追加し、保存して終了します。

```
chmod o+rw /u1/work/idctest1/data/users/authfilter.log
```

正規名の無効化

リファイナリでは、IP アドレスまたはリファイナリが稼働している物理サーバーとは異なるアドレスを使用している場合があります (つまり、HttpServerAddress 変数は Inbound Refinery の config.cfg ファイルで定義されています)。その場合は、正規名を無効にすることをお勧めします。この設定を有効にすると、Apache は、自己参照 URL (応答が戻るサーバーを参照する URL) を作成する必要がある場合は常に、ServerName と Port を使用して正規名を作成します。この設定を無効にすると、Apache はクライアントが指定する hostname:port を使用します (可能な場合)。これにより、ログイン・プロンプトが二重に表示されなくなります。

正規名を無効にするには、httpd.conf ファイルに次の行を追加します。

```
UseCanonicalName Off
```

UNIX でのデフォルトの設定は On です。

Web サーバーの手動セットアップ



INBOUND REFINERY の アンインストール

概要

リファイナリをアンインストールするには、いくつかの方法があります。

- ❖ [Windows](#) でのコマンドラインを使用した [Inbound Refinery](#) のアンインストール (C-2 ページ)
- ❖ [Windows](#) での手動による [Inbound Refinery](#) のアンインストール (C-3 ページ)
- ❖ [UNIX](#) での [Inbound Refinery](#) のアンインストール (C-4 ページ)



重要: Windows では、コントロール・パネルの「アプリケーションの追加と削除」アプリレットを使用して、リファイナリをアンインストールしないでください。完全にアンインストールすることができません。

WINDOWS でのコマンドラインを使用した INBOUND REFINERY のアンインストール

Windows でコマンドラインを使用してリファイナリをアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. コマンド・プロンプト・ウィンドウを開き、アンインストールするリファイナリの bin ディレクトリ（例：`c:\%idcm1%\bin`）に移動します。



警告：必ず正しいリファイナリの bin ディレクトリに移動してください。そうしないと、誤って別のリファイナリをアンインストールする可能性があります。

2. `Installer RefineryUnregisterAll` と入力して、**[Enter]** を押します。
3. アンインストーラが次の作業を実行します。
 - 「スタート」メニューからリファイナリのショートカットを削除します。
 - Windows レジストリのリファイナリのエントリを削除します。
 - IIS の構成を削除します（該当する場合）。
4. リファイナリのインストール・ディレクトリを削除します（例：`c:\%ucm%\ref1%`）。
5. リファイナリが使用していた Web サーバーを削除します。この作業は、システム管理者のみが行うことをお勧めします。
6. 必要な場合は、コンポーネント・マネージャまたはコンポーネント・ウィザードを使用して、コンテンツ・サーバーの `InboundRefinerySupport` コンポーネントを無効にして削除します。



注意：Inbound Refinery ソフトウェアをアンインストールした後、一部のショートカットがキャッシュ・メモリーに残っている場合があります。そのためにショートカットが表示されることがありますが、機能はしません。その場合は、Windows からログアウトしてから、ログインしてください。ショートカットが表示されなくなります。



注意：Inbound Refinery を実行していた各コンピュータの Windows レジストリには、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Stellent` という名前のエントリがまだ残っています。このレジストリ・エントリは、ISAPI フィルタによって自動的に作成されたものです。残っていてもまったく問題はありませんが、必要に応じて削除してもかまいません。

WINDOWS での手動による INBOUND REFINERY のアンインストール

リファインリのアンインストールは、コマンドラインから行うことをお勧めします (C-2 ページを参照)。ただし、Inbound Refinery ソフトウェアの手動アンインストールが必要になる場合があります。そのためには、次の手順を実行します。



警告: 次の手順では、コンピュータから**すべての**リファインリを削除します。

1. すべての IDC サービスと Web サーバーを停止します。
 - a. Windows サービス・マネージャを起動します。
 - b. Inbound Refinery、管理サーバー、Web サーバーのすべてのサービスを停止します。
2. IIS を使用していた場合は、ISAPI フィルタを削除し、仮想ディレクトリを削除します。
 - a. インターネット・インフォメーション・サービス・マネージャを起動します。
 - b. 「既定の Web サイト」を選択し、右クリックして、ポップアップ・メニューから「プロパティ」を選択します。
 - c. 「ISAPI フィルタ」タブを開きます。
 - d. 「Idc Plugin [Refinery instance name]」 エントリをそれぞれ選択し、「削除」をクリックします。
 - e. 「OK」をクリックします。
 - f. 「既定の Web サイト」で、<既定の Web サイト> (ibr) を選択し、右クリックして、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。
 - g. (IIS 6.0 のみ) : 「Web サービス拡張」で、Idc Plugin に対する Web サービス拡張を禁止します。
3. リファインリのメイン・インストール・ディレクトリを削除します (例: C:\ucm\ref1\)。
4. 「スタート」メニューから Inbound Refinery グループを削除します。
5. ごみ箱を空にします。
6. Regedit を実行し、次の作業を行います。
 - a. 次のレジストリ・キーを削除します。
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Intranet
(このキーは空の可能性がありますが)
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Stellent

- b. 各リファイナリに対する次のレジストリ・キーを削除します。
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\IcAdminService[instance_name]_admin
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\IcRefineryService[instance_name]
7. Inbound Refinery をホストするコンピュータを再起動します。
8. 必要な場合は、コンポーネント・マネージャまたはコンポーネント・ウィザードを使用して、コンテンツ・サーバーの InboundRefinerySupport コンポーネントを無効にして削除します。

UNIX での INBOUND REFINERY のアンインストール

UNIX コンピュータからリファイナリをアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. 実行している場合はリファイナリ・サーバーを停止します。
2. 管理サーバーがリファイナリのホスト・コンピュータに存在して稼働している場合は、管理サーバーを停止します。
3. リファイナリのディレクトリを削除します（例：/u1/apps/ucm/ref1）。
4. リファイナリが使用していた Web サーバーを削除します。この作業は、システム管理者のみが行うことをお勧めします。
5. リファイナリを起動するコマンドが自動起動スクリプトに含まれている場合は、コマンドを削除します。
6. 必要な場合は、コンポーネント・マネージャまたはコンポーネント・ウィザードを使用して、コンテンツ・サーバーの InboundRefinerySupport コンポーネントを無効にして削除します。

D

サード・パーティ・ライセンス

概要

この付録には、この製品に付属するすべてのサード・パーティ製品のサード・パーティ・ライセンスの説明が含まれます。

- ❖ [Apache Software License](#) (D-1 ページ)
- ❖ [W3C® Software Notice and License](#) (D-2 ページ)
- ❖ [Zlib License](#) (D-4 ページ)
- ❖ 一般的な [BSD ライセンス](#) (D-5 ページ)
- ❖ 一般的な [MIT ライセンス](#) (D-5 ページ)
- ❖ [Unicode ライセンス](#) (D-6 ページ)
- ❖ [その他の帰属](#) (D-7 ページ)

APACHE SOFTWARE LICENSE

```
* Copyright 1999-2004 The Apache Software Foundation.  
* Licensed under the Apache License, Version 2.0 (the "License");  
* you may not use this file except in compliance with the License.  
* You may obtain a copy of the License at  
* http://www.apache.org/licenses/LICENSE-2.0  
*
```

- * Unless required by applicable law or agreed to in writing, software
- * distributed under the License is distributed on an "AS IS" BASIS,
- * WITHOUT WARRANTIES OR CONDITIONS OF ANY KIND, either express or implied.
- * See the License for the specific language governing permissions and
- * limitations under the License.

W3C® SOFTWARE NOTICE AND LICENSE

- * Copyright © 1994-2000 World Wide Web Consortium,
- * (Massachusetts Institute of Technology, Institut National de
- * Recherche en Informatique et en Automatique, Keio University).
- * All Rights Reserved. <http://www.w3.org/Consortium/Legal/>
- *
- * This W3C work (including software, documents, or other related items) is
- * being provided by the copyright holders under the following license. By
- * obtaining, using and/or copying this work, you (the licensee) agree that
- * you have read, understood, and will comply with the following terms and
- * conditions:
- *
- * Permission to use, copy, modify, and distribute this software and its
- * documentation, with or without modification, for any purpose and without
- * fee or royalty is hereby granted, provided that you include the following
- * on ALL copies of the software and documentation or portions thereof,
- * including modifications, that you make:
- *
- * 1. The full text of this NOTICE in a location viewable to users of the
- * redistributed or derivative work.
- *
- * 2. Any pre-existing intellectual property disclaimers, notices, or terms
- * and conditions. If none exist, a short notice of the following form
- * (hypertext is preferred, text is permitted) should be used within the
- * body of any redistributed or derivative code: "Copyright ©
- * [date-of-software] World Wide Web Consortium, (Massachusetts

* Institute of Technology, Institut National de Recherche en
* Informatique et en Automatique, Keio University).All Rights
* Reserved. <http://www.w3.org/Consortium/Legal/>"
*
* 3. Notice of any changes or modifications to the W3C files, including the
* date changes were made.(We recommend you provide URIs to the location
* from which the code is derived.)
*
* THIS SOFTWARE AND DOCUMENTATION IS PROVIDED "AS IS," AND COPYRIGHT HOLDERS
* MAKE NO REPRESENTATIONS OR WARRANTIES, EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING BUT
* NOT LIMITED TO, WARRANTIES OF MERCHANTABILITY OR FITNESS FOR ANY PARTICULAR
* PURPOSE OR THAT THE USE OF THE SOFTWARE OR DOCUMENTATION WILL NOT INFRINGE
* ANY THIRD PARTY PATENTS, COPYRIGHTS, TRADEMARKS OR OTHER RIGHTS.
*
* COPYRIGHT HOLDERS WILL NOT BE LIABLE FOR ANY DIRECT, INDIRECT, SPECIAL OR
* CONSEQUENTIAL DAMAGES ARISING OUT OF ANY USE OF THE SOFTWARE OR
* DOCUMENTATION.
*
* The name and trademarks of copyright holders may NOT be used in advertising
* or publicity pertaining to the software without specific, written prior
* permission.Title to copyright in this software and any associated
* documentation will at all times remain with copyright holders.
*

ZLIB LICENSE

* zlib.h -- interface of the 'zlib' general purpose compression library
version 1.2.3, July 18th, 2005

Copyright (C) 1995-2005 Jean-loup Gailly and Mark Adler

This software is provided 'as-is', without any express or implied
warranty. In no event will the authors be held liable for any damages
arising from the use of this software.

Permission is granted to anyone to use this software for any purpose,
including commercial applications, and to alter it and redistribute it
freely, subject to the following restrictions:

1. The origin of this software must not be misrepresented; you must not
claim that you wrote the original software. If you use this software
in a product, an acknowledgment in the product documentation would be
appreciated but is not required.
2. Altered source versions must be plainly marked as such, and must not be
misrepresented as being the original software.
3. This notice may not be removed or altered from any source distribution.

Jean-loup Gailly jloup@gzip.org

Mark Adler madler@alumni.caltech.edu

一般的な BSD ライセンス

Copyright (c) 1998, Regents of the University of California

All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without modification, are permitted provided that the following conditions are met:

"Redistributions of source code must retain the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer.

"Redistributions in binary form must reproduce the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer in the documentation and/or other materials provided with the distribution.

"Neither the name of the <ORGANIZATION> nor the names of its contributors may be used to endorse or promote products derived from this software without specific prior written permission.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE COPYRIGHT HOLDERS AND CONTRIBUTORS "AS IS" AND ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE ARE DISCLAIMED. IN NO EVENT SHALL THE COPYRIGHT OWNER OR CONTRIBUTORS BE LIABLE FOR ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL, EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION) HOWEVER CAUSED AND ON ANY THEORY OF LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT LIABILITY, OR TORT (INCLUDING NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN ANY WAY OUT OF THE USE OF THIS SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGE.

一般的な MIT ライセンス

Copyright (c) 1998, Regents of the Massachusetts Institute of Technology

Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of this software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the Software without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify, merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to permit persons to whom the Software is furnished to do so, subject to the following conditions:

The above copyright notice and this permission notice shall be included in all copies or substantial portions of the Software.

THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM,

DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.

UNICODE ライセンス

UNICODE, INC. LICENSE AGREEMENT - DATA FILES AND SOFTWARE

Unicode Data Files include all data files under the directories <http://www.unicode.org/Public/>, <http://www.unicode.org/reports/>, and <http://www.unicode.org/cldr/data/>. Unicode Software includes any source code published in the Unicode Standard or under the directories <http://www.unicode.org/Public/>, <http://www.unicode.org/reports/>, and <http://www.unicode.org/cldr/data/>.

NOTICE TO USER: Carefully read the following legal agreement. BY DOWNLOADING, INSTALLING, COPYING OR OTHERWISE USING UNICODE INC.'S DATA FILES ("DATA FILES"), AND/OR SOFTWARE ("SOFTWARE"), YOU UNEQUIVOCALLY ACCEPT, AND AGREE TO BE BOUND BY, ALL OF THE TERMS AND CONDITIONS OF THIS AGREEMENT. IF YOU DO NOT AGREE, DO NOT DOWNLOAD, INSTALL, COPY, DISTRIBUTE OR USE THE DATA FILES OR SOFTWARE.

COPYRIGHT AND PERMISSION NOTICE

Copyright © 1991-2006 Unicode, Inc. All rights reserved. Distributed under the Terms of Use in <http://www.unicode.org/copyright.html>.

Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of the Unicode data files and any associated documentation (the "Data Files") or Unicode software and any associated documentation (the "Software") to deal in the Data Files or Software without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify, merge, publish, distribute, and/or sell copies of the Data Files or Software, and to permit persons to whom the Data Files or Software are furnished to do so, provided that (a) the above copyright notice(s) and this permission notice appear with all copies of the Data Files or Software, (b) both the above copyright notice(s) and this permission notice appear in associated documentation, and (c) there is clear notice in each modified Data File or in the Software as well as in the documentation associated with the Data File(s) or Software that the data or software has been modified.

THE DATA FILES AND SOFTWARE ARE PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT OF THIRD PARTY RIGHTS. IN NO EVENT SHALL THE COPYRIGHT HOLDER OR HOLDERS INCLUDED IN THIS NOTICE BE LIABLE FOR ANY CLAIM, OR ANY SPECIAL INDIRECT OR CONSEQUENTIAL DAMAGES, OR ANY DAMAGES WHATSOEVER RESULTING FROM LOSS OF USE, DATA OR PROFITS, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, NEGLIGENCE OR OTHER TORTIOUS ACTION, ARISING OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE USE OR PERFORMANCE OF THE DATA FILES OR SOFTWARE.

Except as contained in this notice, the name of a copyright holder shall not be used in advertising or otherwise to promote the sale, use or other dealings in these Data Files or Software without prior written authorization of the copyright holder.

Unicode and the Unicode logo are trademarks of Unicode, Inc., and may be registered in some jurisdictions. All other trademarks and registered trademarks mentioned herein are the property of their respective owners

その他の帰属

Adobe, Acrobat, and the Acrobat Logo are registered trademarks of Adobe Systems Incorporated.

FAST Instream is a trademark of Fast Search and Transfer ASA.

HP-UX is a registered trademark of Hewlett-Packard Company.

IBM, Informix, and DB2 are registered trademarks of IBM Corporation.

Jaws PDF Library is a registered trademark of Global Graphics Software Ltd.

Kofax is a registered trademark, and Ascent and Ascent Capture are trademarks of Kofax Image Products.

Linux is a registered trademark of Linus Torvalds.

Mac is a registered trademark, and Safari is a trademark of Apple Computer, Inc.

Microsoft, Windows, and Internet Explorer are registered trademarks of Microsoft Corporation.

MrSID is property of LizardTech, Inc. It is protected by U.S. Patent No. 5,710,835. Foreign Patents Pending.

Oracle is a registered trademark of Oracle Corporation.

Portions Copyright © 1994-1997 LEAD Technologies, Inc. All rights reserved.

Portions Copyright © 1990-1998 Handmade Software, Inc. All rights reserved.

Portions Copyright © 1988, 1997 Aladdin Enterprises. All rights reserved.

Portions Copyright © 1997 Soft Horizons. All rights reserved.

Portions Copyright © 1995-1999 LizardTech, Inc. All rights reserved.

Red Hat is a registered trademark of Red Hat, Inc.

Sun is a registered trademark, and Sun ONE, Solaris, iPlanet and Java are trademarks of Sun Microsystems, Inc.

Sybase is a registered trademark of Sybase, Inc.

UNIX is a registered trademark of The Open Group.

Verity is a registered trademark of Autonomy Corporation plc

サード・パーティ・ライセンス

索引

A

Apache

- 考慮事項, 2-8
- 手動構成, B-17
- 正規名, B-19
- デバッグ, B-18
- リファイナリ用の構成, B-17
- ログ・ダンプ・ファイル, B-19

B

BuildPortal, A-14

C

- CGI ディレクトリ, Sun Web Server, B-14
- CGI ファイル名
 - IIS 5.0, B-6
 - IIS 6.0, B-12
 - Sun Web Server, B-17
- ConfigureIIS, A-14
- Content Server と Inbound Refinery, 2-12
- CreateShortCuts, A-15

D

- Digital Asset Manager の説明, 1-4
- Disable8dot3NameCreation, A-5
- DisableIISFileHandleCaching, A-5

F

FileEncoding, A-5

H

- HttpRelativeWebRoot, A-5
- HttpServerAddress, A-6
- HTTP 相対 CGI ルート
 - IIS 5.0, B-6
 - IIS 6.0, B-12
 - Sun Web Server, B-16

I

- IDC_Name, A-6
- IdcAdminServerPort, A-6
- IIS の場合の考慮事項, 2-8
- Inbound Refinery
 - Content Server, 2-12
 - PDF ドキュメント, 1-6
 - Sun JVM, 2-6
 - UNIX で実行する場合の考慮事項, 2-5
 - UNIX でのアンインストール, C-4
 - Windows で実行する場合の考慮事項, 2-4
 - Windows でのコマンドラインを使用したアンインストール, C-2
 - Windows での手動によるアンインストール, C-3
 - Windows または UNIX にインストールする場合の考慮事項, 2-13
 - インストール環境の準備, 2-14
 - インストールとセットアップの概要, 2-18
 - オンライン・ヘルプ, 1-5
 - 更新前, 6-2
 - コマンドライン・インストーラを使用した更新, 6-3
 - コマンドラインのインストール, 3-2
 - サポートされる UNIX のバージョン, 2-3
 - サポートされる Web サーバー, 2-7
 - サポートされる Web ブラウザ, 2-10
 - サポートされる Windows のバージョン, 2-3
 - サポートされるオペレーティング・システム, 2-3

サポートされる更新バージョン, 6-1
説明, 1-1
ソフトウェア要件, 2-2
ドキュメント, 1-5
ハードウェア要件, 2-2

InstallAdminServerService, A-6
InstallerJvmPath, A-6
InstallJvm (スクリプト・ファイルのエントリ), A-7
InstallServerService, A-7
InstallServerServiceDependency, A-7
InstallType, A-7
InstanceDescription, A-7
InstanceMenuLabel, A-8
IntradocDir, A-8
IntradocServerPort, A-8
iPlanet 6.x, 「Sun Web Server」を参照
IP アドレス・セキュリティ・フィルタ, 3-4

J

Java 仮想マシン (JVM)
 Inbound Refinery, 2-6
 インストール前の考慮事項, 2-6
JScript エンジン, 2-10
JvmPath (スクリプト・ファイルのエントリ), A-8

L

LessTif, UNIX 上の Outside In Image Export または
 OpenOffice, 2-12
Linux と X Server および LessTif, 2-12

M

magnus.conf ファイル, Sun Web Server, B-15
MIME タイプと IIS 6.0, 4-6, B-12
MIME タイプの登録, 4-6, B-12
Motif, UNIX 上の Outside In Image Export または
 OpenOffice, 2-12

N

NtlmSecurityEnabled, A-8

O

obj.conf ファイル, Sun Web Server, B-14
OpenOffice と X Server, Motif, LessTif, 2-12

Outside In Image Export と X Server, Motif, LessTif,
2-12

P

PDF Converter の説明, 1-2
PDF ドキュメント, Inbound Refinery, 1-6
Platform (スクリプト・ファイルのエントリ), A-9

R

RefineryRegisterAll, A-15
RefineryUnregisterAll, A-15
RemoveShortCuts, A-15
RunChecks (スクリプト・ファイルのエントリ), A-9
RunInstall (スクリプト・ファイルのエントリ), A-9

S

SocketHostAddressSecurityFilter, A-9
Solaris と X Server および Motif, 2-12
SourceDirectory (スクリプト・ファイルのエントリ),
A-5, A-9
Sun JVM と Inbound Refinery, 2-6
Sun Web Server
 CGI ディレクトリ, B-14
 CGI ファイル名, B-17
 HTTP 相対 CGI ルート, B-16
 magnus.conf ファイル, B-15
 obj.conf ファイル, B-14
 インストール後の作業と考慮事項, 4-5
 構成ファイル, 4-5
 考慮事項, 2-8
 手動構成, B-13
 追加ドキュメント・ディレクトリ, B-13
 フィルタ名, B-16
SystemLocale, A-10
SystemTimeZone, A-10

T

TargetDir, A-10
Tiff Converter の説明, 1-3

U

UnconfigureIIS, A-15

UNIX

- Inbound Refinery でサポートされるバージョン, 2-3
- X Server, Motif, LessTif, 2-12
- リファイナリのアンインストール, C-4
- リファイナリの起動と停止, 5-5
- UserLocale, A-10

V

- VaultDir, A-11

W

- WebBrowserPath, A-11
- WeblayoutDir, A-11
- WebServer, A-11
- Web サーバー
 - Inbound Refinery のサポート対象, 2-7
 - iPlanet 6.x, B-13
 - Sun Web Server, 4-5, B-13
 - 考慮事項, 2-7
 - 手動構成, B-1
 - プラグインと CGI プログラムの場所, B-11
- Web サービス拡張 (IIS 6.0), B-12
- Web ブラウザ
 - Inbound Refinery のサポート対象, 2-10
 - JScript エンジン, 2-10
 - Mac クライアントでの推奨, 2-11
 - UNIX クライアントでの推奨, 2-11
 - Windows クライアントでの推奨, 2-10
 - 考慮事項, 2-10
- Windows
 - アプリケーションとしてのリファイナリの起動、停止および再起動, 5-4
 - サービスとしてのリファイナリの開始、停止および再起動, 5-2
- Windows, Inbound Refinery でサポートされるバージョン, 2-3

X

- X Server, UNIX 上の Outside In Image Export または OpenOffice, 2-12
- XML Converter の説明, 1-3

あ

- アドオン, 「変換アドオン」を参照
- アプリケーション
 - リファイナリの起動、停止および再起動, 5-4
- アプリケーション, Windows での管理サーバーの起動と停止, 5-8

い

- インストーラのパラメータ
 - BuildPortal, A-14
 - ConfigureIIS, A-14
 - CreateShortCuts, A-15
 - RefineryRegisterAll, A-15
 - RefineryUnregisterAll, A-15
 - RemoveShortCuts, A-15
 - UnconfigureIIS, A-15
- インストール
 - Windows のコマンドラインでの特別な作業, A-14
 - コマンドラインを使用した Inbound Refinery, 3-2
 - コンポーネント・ウィザードを使用した
 - InboundRefinerySupport コンポーネント, 4-4
 - コンポーネント・マネージャを使用した
 - InboundRefinerySupport コンポーネント, 4-3
 - スクリプト・ファイル, 「スクリプト・ファイル」を参照
 - スクリプト・ファイルを使用する自動インストール, A-12
- インストール前の作業と考慮事項
 - Content Server, 2-12
 - Java 仮想マシン (JVM), 2-6
 - ソフトウェア要件, 2-2
 - ハードウェア要件, 2-2
- インターネット・インフォメーション・サービス (IIS), 4-6, B-12
 - CGI ファイル名, B-6, B-12
 - HTTP 相対 CGI ルート, B-6, B-12
 - IIS 5.0 の手動構成, B-2
 - IIS 6.0 の手動構成, B-7
 - ISAPI 認証フィルタ, B-5, B-10
 - MIME タイプ, 4-6, B-12
 - Web サーバーの指定, B-2, B-7
 - Web サービス拡張, B-12
 - エイリアス, B-3, B-8
 - 仮想ディレクトリ, B-3, B-8
 - パスワード認証, B-2, B-7

フィルタ名, B-6, B-11

え

エントリ, スクリプト・ファイル, A-4

お

大 / 小文字の区別, スクリプト・ファイル, A-4

オペレーティング・システム

Inbound Refinery のサポート対象, 2-3

考慮事項, 2-4

オンライン・ヘルプ, Inbound Refinery, 1-5

か

開始

Windows サービスとしてのリファイナリ, 5-2

ガイド

このガイドで使用する表記規則, 1-4

このガイドについて, 1-4

概要, Inbound Refinery のインストールとセットアップ, 2-18

管理サーバー

UNIX での起動と停止, 5-9

Windows でのアプリケーションとしての起動と停止, 5-8

Windows でのサービスとしての起動、停止および再起動, 5-7

リファイナリを起動および停止するための使用, 5-7

き

起動

UNIX 上の管理サーバー, 5-9

Windows アプリケーションとしてのリファイナリ, 5-4

Windows のアプリケーションとしての管理サーバー, 5-8

Windows のサービスとしての管理サーバー, 5-7
管理サーバーを使用したリファイナリ, 5-10

こ

更新

コマンドラインを使用した Inbound Refinery, 6-3
サポートされる Inbound Refinery の更新バージョン, 6-1

リファイナリの更新を始める前, 6-2

構成

Sun Web Server の構成ファイル, 4-5

Web サーバー, B-1

リファイナリ用の Apache, B-17

構造, スクリプト・ファイル, A-2

考慮事項

Apache, 2-8

IIS, 2-8

Sun Web Server, 2-8

UNIX で Inbound Refinery を実行する場合, 2-5

Windows で Inbound Refinery を実行する場合, 2-4

Windows または UNIX に Inbound Refinery をインストールする場合, 2-13

サポートされる Web ブラウザ, 2-10

サポートされるすべての Web サーバー, 2-7

サポートされるすべてのオペレーティング・システム, 2-4

コマンドライン

Inbound Refinery のインストール, 3-2

Inbound Refinery を更新するための使用, 6-3

Windows での特別なインストール作業の実行, A-14

Windows でのリファイナリのアンインストール, C-2

インストール・スクリプト・ファイル, A-1

自動インストール, A-12

コメント, スクリプト・ファイル, A-3

コンテンツ・サーバー

デフォルトのパスワード, 5-6

デフォルトのユーザー名, 5-6

コンポーネント

コンポーネント・ウィザードを使用した

InboundRefinerySupport コンポーネントのインストール, 4-4

コンポーネント・マネージャを使用した

InboundRefinerySupport コンポーネントのインストール, 4-3

コンポーネント・ウィザードを使用した

InboundRefinerySupport コンポーネントのインストール, 4-4

コンポーネント・マネージャを使用した

InboundRefinerySupport コンポーネントのインストール, 4-3

さ

サービス

Windows でのサービスとしての管理サーバーの起動、停止および再起動, 5-7

リファイナリの開始、停止および再起動, 5-2

再起動

Windows アプリケーションとしてのリファイナリ, 5-4

Windows サービスとしてのリファイナリ, 5-2

Windows のサービスとしての管理サーバー, 5-7

管理サーバーを使用したリファイナリ, 5-10

作成, スクリプト・ファイル, 3-10

サポートされる Java 仮想マシン (JVM) のバージョン, 2-6

し

実行, Windows のコマンドラインでの特別なインストール作業, A-14

実行, 自動インストール, 3-11

自動インストール

実行, 3-11

スクリプト・ファイル, 3-10, A-12

スクリプト・ファイルのエントリの変更, A-13

手動

Apache の構成, B-17

IIS 5.0 の構成, B-2

IIS 6.0 の構成, B-7

iPlanet 6.x の構成, B-13

Sun Web Server の構成, B-13

Web サーバーの構成, B-1

Windows でのアンインストール, C-3

準備, Inbound Refinery 環境, 2-14

す

スクリプト・ファイル

エントリ, A-4

エントリの変更, A-13

大/小文字の区別, A-4

構造, A-2

コメント, A-3

作成, 3-10

自動インストール, 3-10, A-12

スラッシュ, A-4

説明, A-2

パラメータ, A-2

変数, A-4

例, A-3

ログ・ファイル, A-4

スクリプト・ファイルのエントリ

Disable8dot3NameCreation, A-5

DisableIISFileHandleCaching, A-5

FileEncoding, A-5

HttpRelativeWebRoot, A-5

HttpServerAddress, A-6

IDC_Name, A-6

IdcAdminServerPort, A-6

InstallAdminServerService, A-6

InstallerJvmPath, A-6

InstallJvm, A-7

InstallServerService, A-7

InstallServerServiceDependency, A-7

InstallType, A-7

InstanceDescription, A-7

InstanceMenuLabel, A-8

IntradocDir, A-8

IntradocServerPort, A-8

JvmPath, A-8

NtlmSecurityEnabled, A-8

Platform, A-9

RunChecks, A-9

RunInstall, A-9

SocketHostAddressSecurityFilter, A-9

SourceDirectory, A-5, A-9

SystemLocale, A-10

SystemTimeZone, A-10

TargetDir, A-10

UserLocale, A-10

VaultDir, A-11

WebBrowserPath, A-11

WeblayoutDir, A-11

WebServer, A-11

スラッシュ, スクリプト・ファイル, A-4

せ

正規名, Apache, B-19

説明

このガイド, 1-4

スクリプト・ファイル, A-2

そ

ソフトウェアのアンインストール

UNIX, C-4

Windows でコマンドラインを使用, C-2

Windows で手動, C-3
ソフトウェア要件, Inbound Refinery, 2-2

つ

追加

管理サーバーのリファイナリ, 5-10

て

停止

UNIX 上の管理サーバー, 5-9
Windows アプリケーションとしてのリファイナリ,
5-4
Windows サービスとしてのリファイナリ, 5-2
Windows のアプリケーションとしての管理サー
バー, 5-8
Windows のサービスとしての管理サーバー, 5-7
管理サーバーを使用したリファイナリ, 5-10

デバッグ, Apache, B-18

デフォルト

パスワード, 5-6
ユーザー名, 5-6

と

ドキュメント, Inbound Refinery, 1-5
ドキュメント・ディレクトリ, Sun Web Server, B-13

は

ハードウェア要件, Inbound Refinery, 2-2
パスワード, Inbound Refinery のデフォルト, 5-6
パラメータ, スクリプト・ファイル, A-2

ひ

表記規則, このガイドで使用, 1-4

ふ

フィルタ名

IIS 5.0, B-6
IIS 6.0, B-11
Sun Web Server, B-16

ブラウザ

Mac クライアントでの推奨, 2-11

UNIX クライアントでの推奨, 2-11
Windows クライアントでの推奨, 2-10
考慮事項, 2-10

へ

変換アドオン

Digital Asset Manager, 1-4
Inbound Refinery, 1-1
PDF Converter, 1-2
Tiff Converter, 1-3
XML Converter, 1-3

変換と Inbound Refinery, 1-1

変更, スクリプト・ファイルのエントリ, A-13

変数, スクリプト・ファイル, A-4

ゆ

ユーザー名, Inbound Refinery のデフォルト, 5-6

よ

要件

Inbound Refinery のソフトウェア, 2-2
Inbound Refinery のハードウェア, 2-2

り

リファイナリ

UNIX での起動と停止, 5-5
Windows アプリケーションとしての起動、停止お
よび再起動, 5-4
Windows サービスとしての開始、停止および再起
動, 5-2
管理サーバーへの追加, 5-10
管理サーバーを使用した起動、停止および再起動,
5-10
管理サーバーを使用した起動と停止, 5-7
ログオン, 5-6

リファイナリ, Apache の構成, B-17

リファイナリへのログオン, 5-6

ろ

ローカル・ホスト (127.0.0.1), 3-4
ログ・ダンプ・ファイル, Apache, B-19
ログ・ファイル, インストール, A-4